

古代地方都市論

多賀城とその周辺

平川 南

Report on Provincial City of Ancient Japan

- ① 古代地方都市の条件
- ② 多賀城にみる都市的諸要素
- ③ 多賀城と都市概念

【論文要旨】

一九八七年に開催された国立歴史民俗博物館の共同研究「古代の国府の研究」の総括シンポジウムでは、国府における都市的機能や地域的広がりをいづゆる国府域を設定することに對して否定的見解が目立った。しかし、その後、全国各地で国府跡の発掘調査が実施され、大きな成果をえたが、なかでも陸奥国府が置かれた多賀城跡の前面の大規模な調査によって、都城の都市計画の根本をなすものとされた方格地割が確認されたことは注目すべきである。さらに、都市成立の諸条件とされる方格地割地域における地区構成と各地区の計画的建物配置、交通体系の結節点、都市祭祀空間の設定、生産体制の集中などの点において、発掘調査等で数多くの成果が得られたのである。

しかし先の総括シンポジウムを踏まえて、井上満郎氏は、国府が都市として成立するためには一定の境界概念やさまざまな都市規制が確認されなければならないが、国には郡という行政区画から切り離されたいかなる区画も存在しておらず、つまりは国府には都市規制が存在しないのであって、国府を古代都市とは考えられないと指摘している。

そこで、国府における都市規制の条件について検討した結果、大略は次のとおりである。

多賀城前面地区における方位規制は大路・小路と建物および溝などに及んでいる。また国府域の問題については、多賀郡、宮城郡を経て、権郡の多賀郡・階上郡の領域は、『和名類聚抄』宮城郡の多賀郷・科上郷に継承され、やがて留守職による高用名という形で、国府一帯の特別行政区として建てられた所領に引き継がれている。さらに郡家所在郷が他郷と異なっていた点を出土文字資料で証明し、国府所在郡も他郡と異なる条件を整えていたであろうという見通しを立てた。

以上の点を総合的に判断するならば、多賀城は、いまだ不確定要素を含みながらも、古代の都市の諸条件をほぼ満たしており、多賀城を古代地方都市とみなすことができるであろう。いまだ広範囲の調査を実施していない一般諸国の国府については、以上の多賀城の諸条件を及ぼしうるかどうかは、現段階では結論づけがたいので、今後の課題としておきたい。

①古代地方都市の条件

都市研究は、現在、最も重要なテーマの一つとして、各分野の研究者によって推し進められている。国立歴史民俗博物館においても、創設当初よりの共同研究の大テーマ―都市に関する生活空間の史的研究―として取り組んできた。その第一期の共同研究「古代の国府の研究」のまとめとしてのシンポジウムの際に、鬼頭清明氏は都市概念について、次のように整理された⁽¹⁾。

我々の使用すべき都市の概念は、歴史地理学・考古学・文献史学の三分野を総合できるような、農村と対比されるべき人間の居住区として、比較的大規模な人口をもち、非農業的な産業―商業と工業―とをその基礎にもつものと広く捉えておく必要があるとされたのである。

古代の日本において、その都市の典型を中央の都城に求めるとすれば、その都城を模した諸国における地方行政の中心・国府についても、その都市概念およびその具体的諸条件について検証を試みる必要があるであろう。その具体的諸条件とは、主要なものは以下のとおりと考えられる。

都城の都市計画の根本をなすものは、方格地割である。従来、歴史地理学研究者によって方八町などの方格地割の存在が指摘された。その存否が国府の都市条件の根幹として論ぜられることもあった。歴博の共同研究「古代の国府の研究」の総括シンポジウム（一九八七年三月八日、国立歴史民俗博物館において開催）においても、この点が論議の中心となった。一九八七年までの時点においては、方格地割の代表例とされた周防国府跡をはじめとして、発掘調査の成果は、古代の八・九世紀段階に方格地割遺構を確認することができなかった。その点から、国府における都市的機能を否定する見解が提案された。また、古代の国府という概念のなかに、地域的広がりや規模を認識することに対しても、否定的

な意見も提案された。

しかし、このシンポジウムにおいても、例えば、鬼頭清明氏は、国府は在地社会に自然に成立したものではなく、権力が作り出したものだけに、方格地割に基づく国府の存在を今後も発掘調査で検証することができる可能性をも否定すべきではないと述べている。また、筆者も、国府は、中心的施設とその周辺が郷単位ぐらいの広がりを持ち、特別の行政区画として存在する、すなわち、それこそが国府域であって、それが方格地割の広がりによって認識されるのか、あるいは方格地割や閉塞施設があるかどうかという問題を問わずとも、そういった域というものを設定することができないのかと指摘した⁽²⁾。

ところで一九八七年以降の全国各地における国府跡の発掘調査によって、大きな成果が得られている。

各地の国府跡のなかでも、陸奥国府が置かれた多賀城跡の前面の大規模な調査によって、多賀城創建当初（八世紀前半）までさかのぼらないが、少なくとも八世紀後半段階には、多賀城の前面に方格地割が確実に認められるのである。

その方格地割の実態の検討も必要である。すなわち、方格地割地区における全体の地区構成と各地区の建物配置などを明らかにしなければならない。

都市成立の重要な条件の一つは、あらゆる交通体系の結節点に位置することによって、行政・軍事および経済活動などを円滑に運用させ、そのことにより都市の成熟度を飛躍的に増大させることが可能となるのである。その意味から、国府と道・港津・河川などとの関係から、交通体系を明らかにせねばならないであろう。

この交通体系とも密接に関連するのが、市の存在である。市については文献史料上からの研究がもっぱらで、いまだ発掘調査によって地方の市を空間的構成としてとらえた例を聞かない。

さらに、古代の都市空間を検証する上で、欠かすことができないのは、祭祀等の宗教的要素である。つまり、方格地割等によって、視覚的都市空間を把握するのみではなく、古代国家が形成した都市祭祀が地方社会の中心的場としての国府において、いかに実施されたか、その祭祀等の実態を点的につなぎ合せて把握することによって、その都市空間の拡がり、いいかえれば、古代における国府域の設定を把握することも可能となるのではないか。

以上のような地方都市形成の諸条件を具体的に検証するフィールドとしては、現状では大宰府を除くと、陸奥国府の置かれた多賀城においては、ほかにない。

なお、最近、多賀城跡の前面に関わる大規模な発掘調査の成果が相ついでで公開された。多賀城市教育委員会『山王遺跡Ⅰ―仙塩道路建設に係る発掘調査報告書―』（一九九七年三月）、宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅱ―多賀前地区遺構編―』（一九九五年三月）、さらに、多賀城市史編集委員会『多賀城市史』第一巻、原始・古代・中世（一九九七年三月）が刊行され、その中の「第五節 古代都市多賀城」（高野芳宏・菅原弘樹氏執筆）は、多賀城跡の前面地区に関する発掘調査成果を諸項目にわたって整理されている。すなわち、道路網と地割、建物配置と構成、城外でのまつり・まじない、周辺の生産遺跡などに分けて、詳細にまとめられている。

小論では、発掘調査成果については、以上の報告書と『多賀城市史』に全面的に依拠しながら、改めて、古代地方都市論として構成し直し、かつ都市の要素をさらに広げながら、古代の多賀城は地方都市という条件を満たしているかどうかを検討してみたい。³⁾

② 多賀城にみる都市的諸要素

(1) 多賀城以前の状況

山王遺跡は、多賀城市山王・南宮の両地区を中心とする東西約二キロメートル、南北約一キロメートルの広範囲にわたる遺跡である。遺跡は旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に立地しており、海拔約五メートルを計る。この山王遺跡を中心として、多賀城跡の南西から南東にかけて、新田・市川橋・高崎遺跡などの大規模な遺跡群が存在している。

一九八三年に実施された山王遺跡第四次発掘調査において、初めて幅一二メートルの道路跡が発見され、さらに一九八八年の第八次調査では、その一二メートルの道路跡の延長が確認され、新たにこの道路から分岐する幅三メートルの南北道路跡を検出した。その後、一九九三年には、多賀城跡の外郭南門からまっすぐにのびる幅二三メートルにもおよぶ南北大路が発見された。

このように、一九九四年段階において、多賀城南面に、東西道路は多賀城外郭南辺築地跡から南へ六条（外郭南門から約八四〇メートル）、南北道路は南北大路から西へ九条（政庁中軸線から約一一〇九メートル）が確認され、多賀城前面に大規模な方格地割が形成されていたことが明らかになったのである。

多賀城跡の本格的発掘調査が開始された一九七〇年代頃までの通説によれば、多賀城は、奈良時代前半、律令国家の最北端に建てられたとされた。そして、多賀城の地は在地勢力の希薄な地とみられていた。

しかし、近年の発掘調査によって、多賀城創建に先行する七世紀代の官衙遺跡が相ついで多賀城の南と北で発見された。一つは、南の仙台市

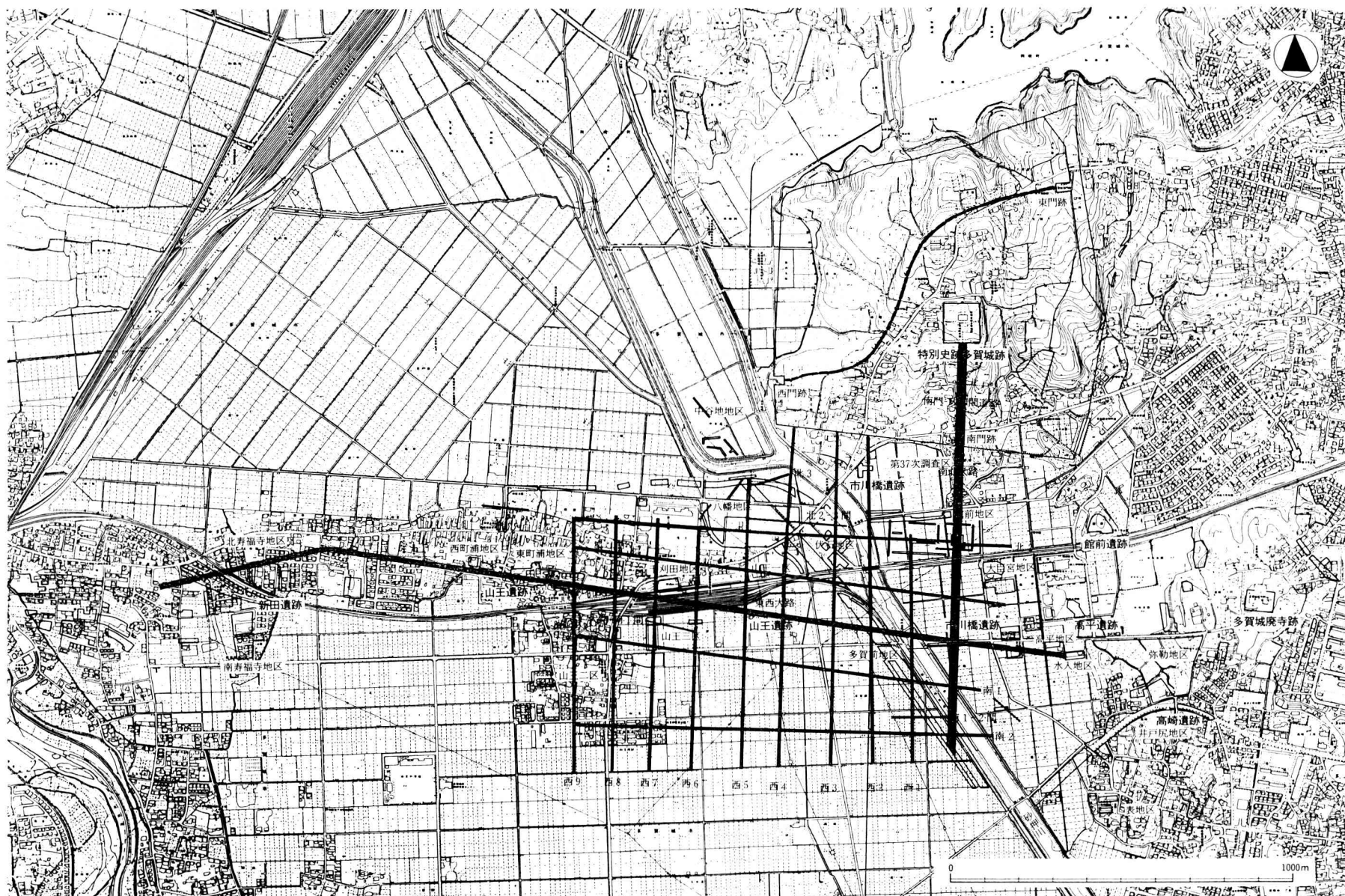


図1 多賀城跡周辺の遺跡と道路跡（『多賀城市史』第1巻〈1997年〉より）

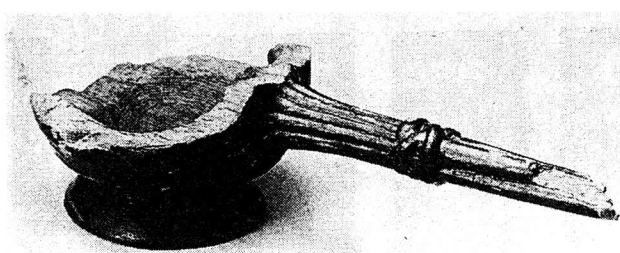


図2 柄香炉 山王遺跡八幡地区（宮城県教育委員会）

郡山遺跡である。これまでの調査の結果、二時期の遺構が重複し、第Ⅰ期は七世紀半ばから末頃まで、第Ⅱ期は七世紀末から八世紀初頭頃と判明した⁽⁴⁾。第Ⅰ期の七世紀中頃という年代は、全国の官衙遺跡のなかでも最古に属する。もう一つは、多賀城よりも北の古川市名生館遺跡である。その遺跡は、大崎平野の西北端に位置し、発掘調査によって、七世紀末から九世紀後半までつづく官衙遺跡であり、四時期の遺構があることが明らかになった⁽⁵⁾。

さらに、多賀城の置かれた地においても、多賀城設置以前の様相は、従来の予測とは異なる大規模な開発状況を確認できる。多賀城跡の西南山王遺跡八幡地区の発掘調査では、古墳時代後期（七世紀前半）の一〇〇軒をこえる大規模な堅穴住居跡群と注目すべき遺物を出土している。

遺物のなかでも、特筆されるのは、金属器の柄香炉を模した黒漆塗の木製品である。柄香炉は、仏前で香をたきしめるための香炉に柄をつけて携帯できるようにしたものである。

また、多賀前地区では、多量のト骨が出土している。これらのト骨は、馬ないし牛の肋骨を半截したものである⁽⁶⁾。内面の髄質部を削り、四×七ミリメートルの長方形の凹みを連続して二列につけ、さらに凹みの底面を焼いている。

一方、多賀城跡内においても、創建以前の遺構の存在が明らかになってきている⁽⁷⁾。

外郭南門地区西半部で検出した遺構は、築地跡二、築地の基礎地業一、横穴墓三などがある。横穴墓は、調査区西端で築地の基礎地業SX一五六二の下層から三基並んで検出された。これらは岩盤（凝灰岩）が

露出する南斜面に構築されている。この調査は築地基礎地業を部分的に除去しただけであり、検出した三基（SP一五五九、一五六〇、一五六一）のほかにも横穴墓が分布して群を形成する可能性がある。

遺構の重複から知られる下限年代とSP一五五九・一五六〇の構築時と墓前祭の土器の検討により、両横穴墓の年代はおおよそ七世紀後葉から八世紀前葉までの間と考えられる。

以上の諸例からも、多賀城の地は、多賀城創建以前において、在地勢力による一定の開発が行われた地であり、以下に述べるような「古代地方都市」としての整備の前提条件が、多賀城創建以前にすでに備わっていたといえるであろう。例えば、多賀城創建後の前面地区の各所で確認される大規模かつ多様な都市祭祀は、都城における律令祭祀の導入によることは間違いないが、創建前の多賀前地区の多量のト骨の存在は、多賀城の地に七世紀前半において、すでに都市的機能の重要な条件の一つである祭祀空間の形成がなされていたことを意味しているであろう。

(2) 方格地割

多賀城跡の南西部にあたる微高地では、幅約二三メートルの南北大路や幅約一二メートルの東西大路をはじめ、幅三〜八メートル程の東西・南北の小路が多数発見されている。南北大路は、南門から南に向かってまっすぐ延びるメインストリートで、いわば多賀城の朱雀大路である。方向は政庁中軸線と同じくN―一度四分―Eである。

一方、東西大路は、多賀城南辺築地（E―七〜八度―S）と方向がほぼ一致し、その約五町（約五五〇メートル）南を通過する幅約一二メートルの道路である。

南北の小路は、南北大路を基点に約一・一キロメートル西まで九条が想定される。方向は、若干のばらつきが認められるが、おおよそ真北方向で、南北大路とほぼ一致している。各小路間の距離は一一〇〜一四〇

メートル程である。

道路網の整備と変遷は、次のようになる。

Ⅰ期（八世紀後半） 多賀城府庁と南門の南延長上に幅一九メートルの南北大路とともに、多賀城南辺築地に平行する幅約一二メートルの東西大路が造られ、幹線道路が整備された。

Ⅱ期（九世紀初頭頃） 南北大路が幅二三メートルに拡幅されて、これを基準として西側に平行する八条の小路、および東西大路を基準としてその両側に平行する二条の小路が、一〇～一四〇メートル程の間隔で建設され、平行四辺形状を単位とした方格地割が形成される。方格地割の範囲は、東西が南北大路から西九小路までの約一・一キロメートル、南北が東西大路をはさんで幅約二六〇メートルである。

Ⅲ期（九世紀後半～十世紀後半） Ⅱ期の方格地割の南北にさらに東西小路が加えられ、地割の範囲が拡大される。ただし、この時期に追加された小路の方向は南北大路に直交するもので、Ⅱ期の東西小路との間に新たに形成された区画は台形状を呈する。地割全体の規模は南北約六八〇メートルとなる。

以上みたように、九世紀初頭頃に行われたⅡ期の整備で、町並が成立する。このⅡ期は、城内の実務官衙が急増する時期にあたり、町並の造成は多賀城の機能整備の一環として行われた可能性も考えられるとされている。

ところで、古代地方官衙周辺においては、大宰府で条坊の存在が一部明らかになっているが、そのほかの国府周辺では、現段階でこうした方格地割の存在は知られていない。

(3) 地区構成

方格地割の範囲は、時期によって異なるが、地割内部は、部分的に畑地として利用されているが、大部分は掘立柱建物・竪穴住居などを配置

する地域として使われている。東西大路に面した区画では、山王遺跡千刈田地区や多賀前地区に国司の館があり、上級の官人たちの住居跡とみられる。これらの敷地は一町四方の区画全体を占めることが多い。一方、大路からやや離れた地域では陸奥国内の郡に関わる施設や、工房、下級の役人達の住居が置かれている。

イ、国司の館―山王遺跡千刈田地区

山王遺跡第九次調査において、発見した遺構には、掘立柱建物跡一九棟、井戸跡二基、土器集積遺構一基などがある。なかでも、調査区北東部に位置する東西九間以上、南北四間の大規模な東西棟四面廂付建物跡は、この地が重要な施設の中心部であることを示している。この地区で発見された遺物のなかで、多量の緑釉陶器、灰釉陶器、中国産陶磁器は多賀城内でも例がなく、これは明らかに奢侈品であり、この遺跡の性格をものがたっているであろう。

主要遺構のなかに井戸が存在する点や下駄、錘、櫛などの生活用品の出土は、この場で日常生活が行なわれていたことを示している。最も注目される遺物としては、「右大臣殿 錢馬収文」と書かれた木簡（題箋軸）がある。

・右大臣殿

錢馬収文

（五五）×三六×八

題箋両面の内容は全く同文と判断できる。「右大臣」は太政官の長官で左大臣につぐ重職である。「錢」は文字どおり錢別のこと、「うまのはなむけ」と訓んでいる。「錢馬」は錢別のための馬のこと、「収文」は通常、諸国の貢納物に対する中央の役所の受取状のこととして用いている。全体の内容については、私見によれば、次のような解釈が成り立ち得るであろう（拙稿「多賀城市山王遺跡第九次調査の木簡について」

『月刊考古学ジャーナル』No.339 一九九一年）。

当時、陸奥国の按察使は大納言までは兼任しているが、右大臣に昇進すると、按察使の職を辞するのが常であった。そこで陸奥国守は、東北地方の最高行政官「按察使」が右大臣に昇進するにあたって餞別として陸奥国の最高の贈り物・馬を進上したと考えられる。

もちろん、按察使は在京しているが、陸奥国を任地とする建前から一種の儀礼として右大臣への貢馬を「餞」と表現したのであろう。陸奥国守から餞別の馬が都の右大臣家に送られ、その収文（受取状）が陸奥国司宛に送付されたと考えられ、その一連の文書（送る際に付せられる陸奥国司解文の案文等）に題箋を付して保管していたのであろう。これがのちの陸奥・出羽守から摂関家への貢馬のはじまりとみなすことができるであろう。

本遺跡は、遺構・遺物などの考古学的検討からも国司の館と想定できるし、さらに本木簡によって、国守の館であるという可能性をも提示できるきわめて重要な資料である。

また、本遺跡の年代は十世紀前半とされている。この時期は、律令体制の衰退とともに地方政治が大きく変質を遂げるのである。地方政治の中心となる国府においても、しだいに国司の館の役割がその重要性を増してくる時期でもある。

ロ、国司の館——山王遺跡多賀前地区南区

多賀城の東西大路に接する南側で国司館と考えられる遺構が発見された。

南北一三九メートル、東西一一八メートルの平行四辺形の区画で、中央部を北から南に向かって流れる遣り水状の遺構があり、これとは重複せずに多数の掘立柱建物が配置されていた。九世紀・十世紀の遺構はB₁・B₄期に分けられるが、各期とも遣り水状の遺構を中心とした建物配置は基本的に変わっておらず、一貫して区画全体が一つの施設として使わ

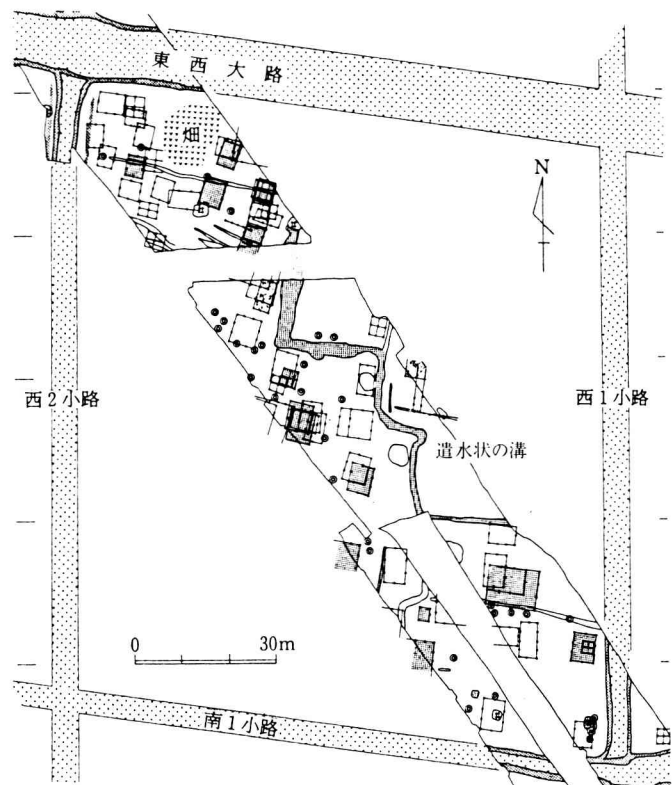


図6 山王遺跡多賀前地区南区 9世紀中頃
（『多賀城市史』第1巻より）

れたことがわかる。

遣り水状の遺構は幅〇・五～三メートルの蛇行する溝で、コーナー付近には樹ないし貯水施設とみられる土壇が設けられている。園池がなく、直角に屈折する部分があるなど、一般の「遣り水」と異なる点もあるが、庭園を意識したものと思われる。

なお、十三世紀に描かれた『北野天神縁起絵巻』には、菅原道真邸で寝殿造の建物の間を屈曲しながら巡る遣り水が描かれており、その雰囲気うかがうことができる。

出土遺物では、煮沸・貯蔵・供膳用の土器、木製容器、土錘、砥石などの多様な日常生活具が出土しており、白磁・青磁・長沙窯系黄釉褐彩や灰釉陶器・緑釉陶器などの高級品が多く含まれることや、遣り水状遺

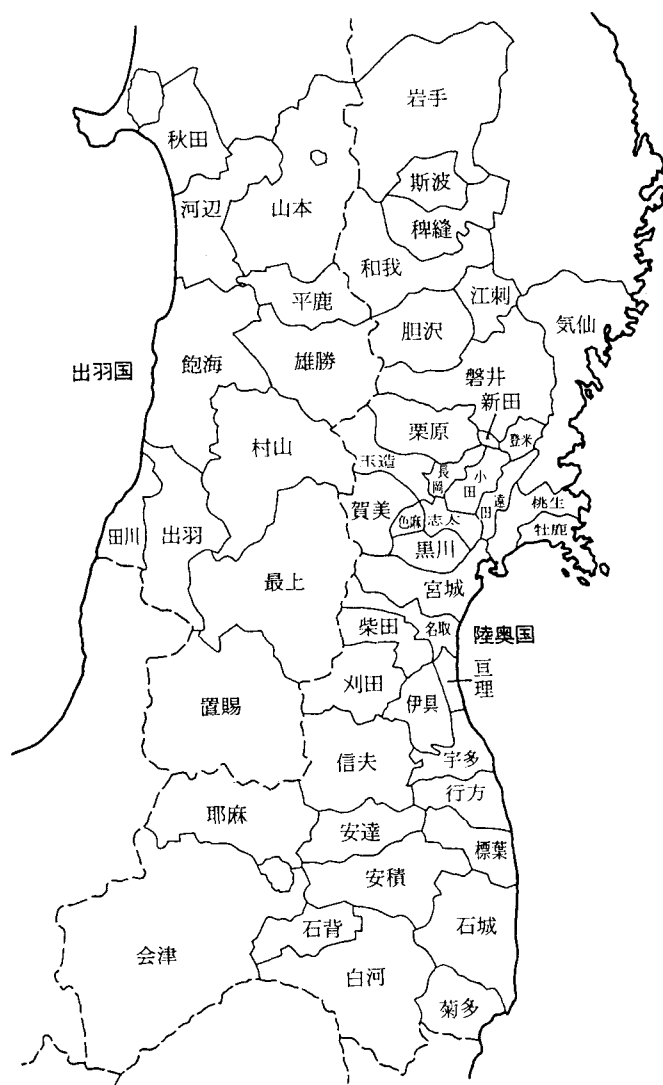


図7 陸奥・出羽両国の郡名分布図
(『多賀城市史』第1巻より)

構周辺では供膳用の土器が集中するなど、千刈田地区の国守館跡と類似した傾向を示す。

なお、遣り水状遺構周辺から出土した多量の供膳用土器の中に「宮城」「賀美」「巨理」といった郡名とみられる墨書があることを考慮すると、郡司らを招いての饗宴がここで行われた可能性もある。

ハ、官衙地区―山王遺跡多賀前北区

南北一二四メートル、東西一〇九メートル前後のやや台形に近い区画である。九・十世紀の遺構はB₁～B₄期に分けられるが、各期を通して東西方向の二条の材木堀によって南部・中央部・北部に仕切られている。そのうち、九世紀後半のB₂期の区画内施設は次のとおりである。

東西大路に面する南部では、三面に廂のつく桁行五間、梁行三間の東西棟を主屋とし、その南東に副屋として桁行四間以上、梁行二間の南北棟を置いている。さらに、これらを囲むように北側に八棟の小規模な高床倉庫がコの字型に配置している。建物配置および倉庫群の存在から、公的な色彩の強い空間であると思われる。

中央部では、桁行が三ないし二間、梁行が二間の小規模な掘立柱建物や倉庫のほか井戸、貯蔵施設が配置され、空地の一部は畠として利用されている。井戸、貯蔵施設、畑は南部にみられなかった要素であり、家政関連の施設が置かれたブロックと考えられる。北部については、ほとんど調査区外のため不明な点が多い。

南部・中央部の出土遺物には白磁・青磁のほか灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器・土師器、木製皿・曲物、硯、編み台、農耕具、紡錘車などがある。

る。日常生活具が多い点、高級陶磁器が豊富にある点は、千刈田地区や多賀前地区南区と同様である。

二、館前遺跡

館前遺跡は多賀城の東南約一〇〇メートルの小さな丘に所在する。館前遺跡の発掘調査結果は、掘立柱建物六棟、整地層・溝跡などが発見された。六棟の建物跡は同一時期に存在しており、多賀城第三期以降と考えられる。台地の中央部に位置する四面廂の建物を中心とする建物群のあり方は、まさに多賀城跡の政庁跡に匹敵するほどの官衙遺跡であり、多賀城跡に密接な関係をもつ遺跡である。

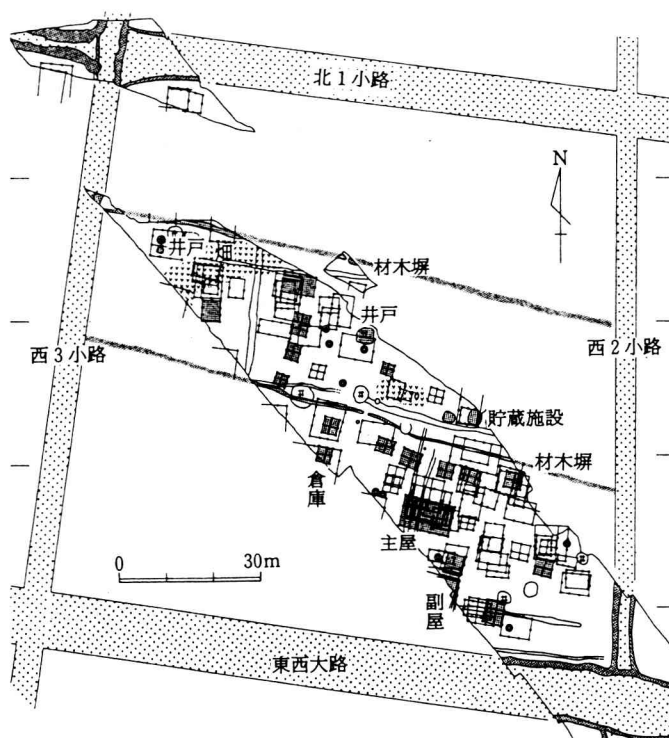


図8 山王遺跡多賀前地区北区 9世紀後半
(['多賀城市史』第1巻より)

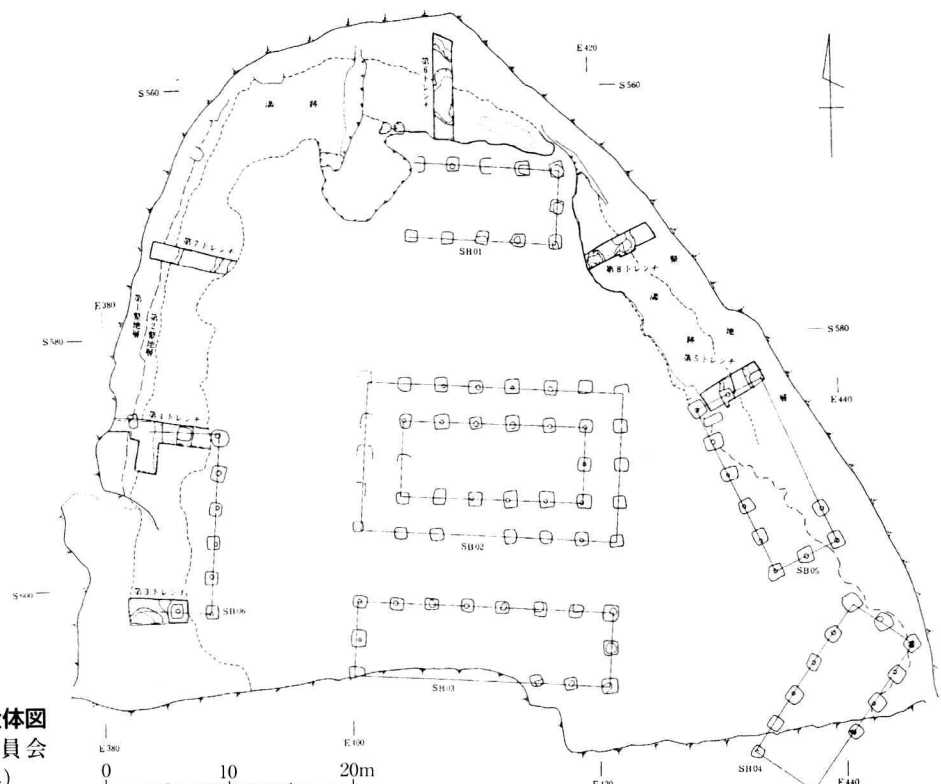


図9 館前遺跡の遺構全体図
(多賀城市教育委員会
『館前遺跡』1980年)

ホ、陸奥国内の郡の出先施設

伏石地区は北1・2道路と西3・4道路で画される区画の内部にあたる。東西大路からは一区画分はなれている。区画内部には小規模な掘立柱建物跡が存在し、そのほか鍛冶工房跡・井戸跡・畑跡なども確認されている。

木簡は区画内の中央よりやや南東にある木組みの井戸跡SE三〇三八から出土した。この井戸の構築年代は九世紀第二4半期頃と考えられている⁽¹⁰⁾。

・「会津郡

主政益継

・「解文

案

(二八九)×四六×七 〇六一

本木簡は、紙の文書を保管する目的で付した題箋軸である。文字の記された題箋部は、五八×四六ミリメートルのやや長方形を呈している。この題箋軸は、会津郡主政の作成した解文の案を収めたものであると考えられる。郡の主政の解文の案ならば、本来郡家に保管されるべきであ

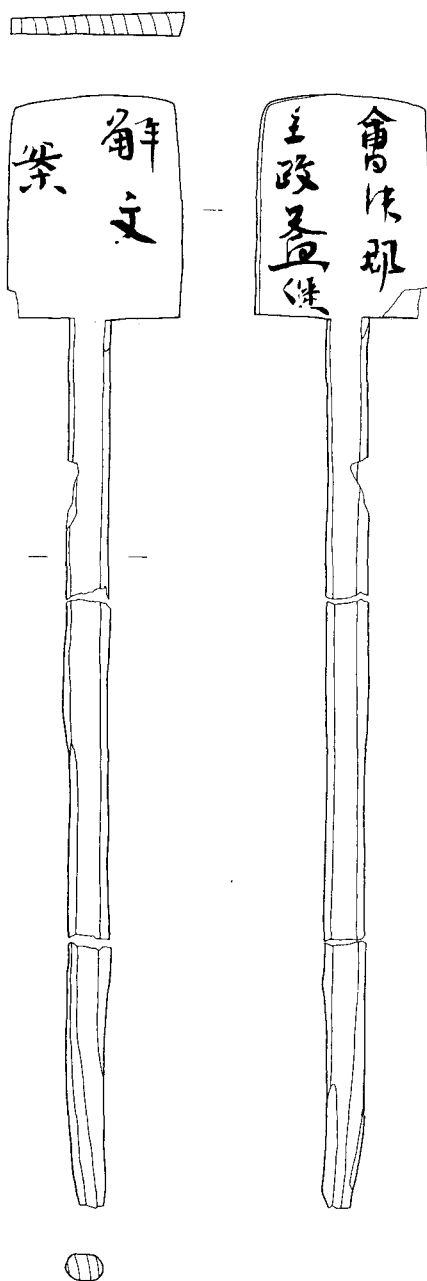


図10 題箋軸木簡「会津郡主政益継」
「解文案」

山王遺跡伏石地区
(宮城県教育委員会)

るが、この題箋軸は陸奥国府・多賀城下の山王遺跡から出土したのである。平城京には、相模国の調邸が設置されていた例が知られている。

諸国からの調庸物貢進に際して、まず各国から軽貨物を都に送付し、平城京において、その軽貨物を用いて調庸品目を調達したと考えられる。調邸はそのための施設として、各国とも都に設けたものである⁽¹¹⁾。

この調邸の例を参照にするならば、この「会津郡主政益継・解文案」と記された題箋軸はおそらく、国府には各郡の出先機関が存在したことを意味しているのではない⁽¹²⁾。

なお、多賀城への人口集中の一端は、徭丁と兵士にみられる。

多賀城で働いた徭丁は、弘仁十三年(八二二)に定められた大国の定員によると、文書作成に携わる書手・紙すき・文書の装丁・筆や墨の製作・文箱や木簡の製作・兵器の製作に携わった工人、その他さまざまな雑用に従事している計約七〇〇人とされている。このほか多賀城には、他の国府と異なつて多数の兵士が常駐していたが、その数は、弘仁年間(八一〇～八二四)で五〇〇人という。

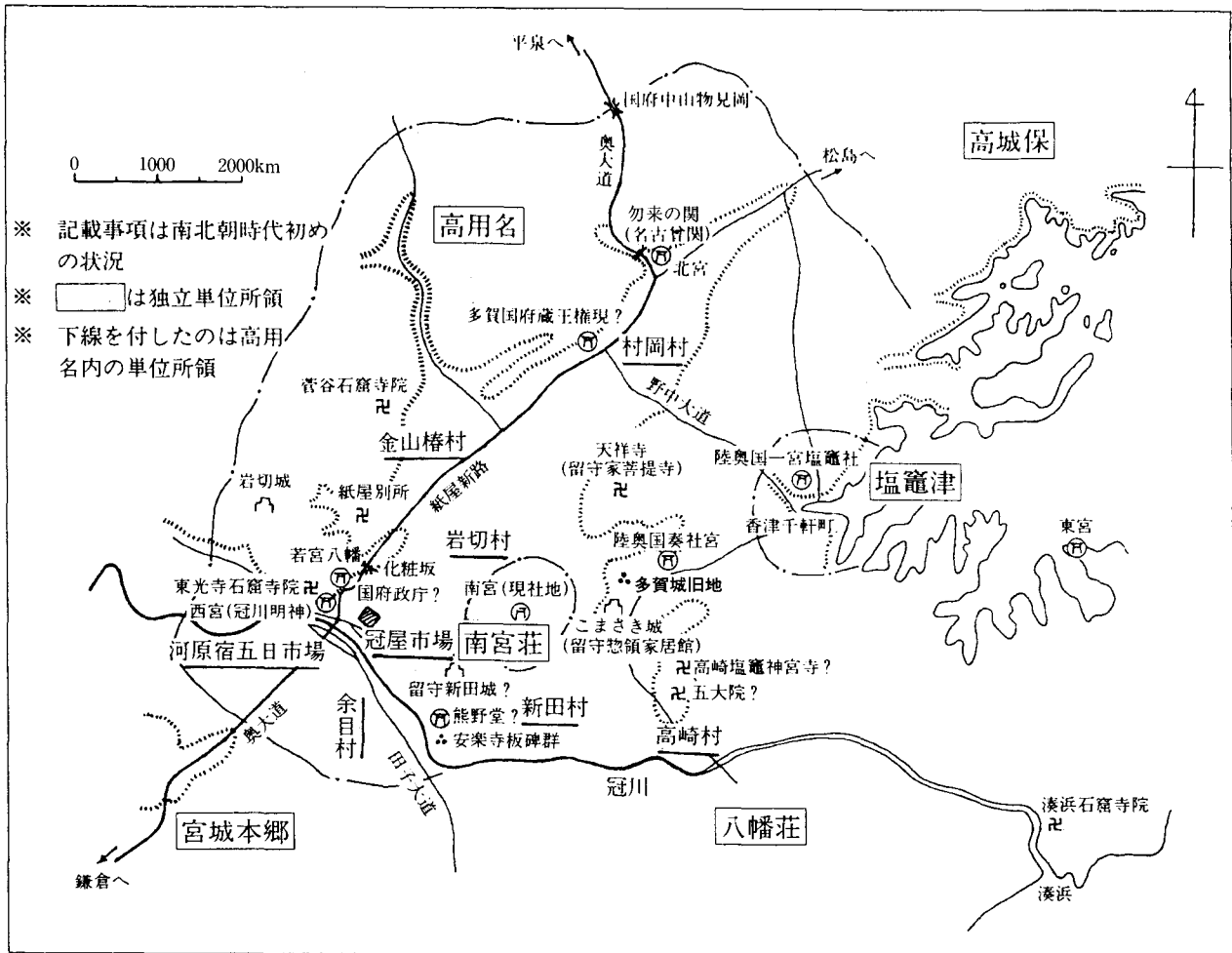


図11 中世の多賀国府 (『よみがえる中世〔7〕みちのくの都 多賀城・松島』平凡社〈1992年〉より)

(4) 水陸交通と港湾

多賀城周辺の水陸交通は、古代においては、前述の多賀城前面の南北大路・東西大路などの調査例があるが、周辺の様相は明らかでない。そこで、中世における水陸交通および港湾の状況を、近年の中世史研究の成果に基づき、簡略に紹介したい。

中世の奥州街道「奥大道」は、現在の仙台市岩切の東光寺・冠川明神の前で冠川を渡り、そこで、北上する本道「奥大道」と古代多賀城の地へ向かう支道「おくのほそ道」に分かれていた。

一方、河川交通と港湾は次のように想定される。

古代・中世の多賀国府周辺では、今日とはかなり様相を異にする景観が広がっていた。この時代には、海水が現在の多賀城市八幡付近まで入り込み、広大な入海「潟の世界」をつくっていたのである。今でも多賀城市八幡・笠神などには、往時の海水の侵入を示す地名が分布している。例えば、八幡地区に「塩入」「塩留」「塩窪」、笠神地区には「船塚」といった地名が残っている。かつて冠川（七北田川）は岩切・新田から東流し、市川（砂押川）を合わせ七ヶ浜町の湊浜の地で太平洋に注いでいたのである。湊浜は古代・中世において多賀城・岩切に通じる河口港であったと考えられる。

波静かで外洋船も停泊できる塩竈浦は、陸奥国府多賀城の外港でもある。そこには今も「香津千軒」（「香津町」という地名も現在残っている）と伝えているところがあり、香津というまでもなく国府津の宛字である。

一方、湊浜は、内陸に直接通ずる水路（冠川＝七北田川）をもっている。



図12 運河状遺構 多賀城外南方（砂押川東岸）

この両者があいまって多賀国府の港湾機能を形成していたと考えられる。

そこで、右の想定に関連する古代の運河状遺構が多賀城跡の前面の発掘調査で明らかにされている⁽¹⁴⁾。

調査地は多賀城跡外郭南辺築地西半部の南に位置し、政庁地区の西に発し、鴻の池を通って南にひらく小さな沢の沢口の西端部にあたる。また調査地の約一五〇メートルほど南には砂押川が北西から南東に向かって大きく迂回しながら流れている。

検出した遺構は、溝一〇、掘立柱建物跡八、一本柱列一、道路遺構一、井戸跡二、土壇三などがある。その中でも、SD一二二一は、断面箱堀形をなす大規模な素掘りの溝である。これには新旧二時期の重複がある。新しい方のSD一二二一-B大溝は、長さ約四五メートルにわたり検出し、その規模は上端幅約四・五メートル、深さ約一・五メートルほどである。古い方のSD一二二一-AはSD一二二一-B大溝の南端部西壁で検出された溝である。この大溝は、南北にほぼ直線的に延びる大規模な箱堀形の溝であり、溝底面は北か南にかけてゆるやかに傾斜している。周囲の地形、規模、形状などからみてこれを自然の水路と見做すことはできないのである。むしろ平城京跡で検出された東堀河と類似する点が多いことから多賀城と南を流れる砂押川とを結ぶ堀河（運河状遺構）とみるのが妥当であろう。

また、この大溝とSX一二四〇道路遺構は主軸方向が多賀城政庁の中軸線（磁北に対し北で約9°30'東に振れる）にほぼ一致している。このことはこの時期に多賀城の城外南面に政庁の中軸線と方向を同じくする計画的な地割りが存在したことを想起させる。

結局、この地域はAⅠ期（八世紀）には耕作地として、AⅡ期（九世紀前半頃）には多賀城に関わる建物などが存在する地域として、B期（十一世紀頃）にはやはり多賀城と密接な関連をもつ建物・堀河・道路・

井戸などが存在する地域として利用されていたことが推定された。また、遺構の方向については遺構期ごとに一定のまとまりが把握された。すなわち、A期には多賀城の外郭南辺築地にはほぼ一致し、B期には多賀城の政庁中軸線にはほぼ一致する傾向が認められたのである。そして、この方位からも、堀河は、多賀城の水陸交通体系の計画的整備として掘削されたもので、南の入海へ続く水路と考えられる。

(5) 祭祀

律令的祭祀⁽¹⁵⁾とは、八世紀初頭に成立した『大宝令』の「神祇令」に規定された、国家の手によって行う国家的祭祀のことをいい、その具体的内容は『延喜式』によって一応知ることができる。

律令的祭祀のなかで重要な祭祀のひとつが大祓である。大祓は毎年六月と十二月の晦日に、百官男女を祓所に聚集して実修した祭祀で、『貞観儀式』などには朱雀門前で行われたとみえる。『法曹類林』に引く「式部記文」には、大祓儀を「大伴壬生二門間の大路に於てす」とあって、大伴（朱雀）門と壬生門の間の大路、つまり二条大路上で行っている。

長岡京跡の場合は、京外の西と東北に大祭場がある。平城・長岡京跡の祭場は、宮・京・京外という三重の構造からなり、平安京における七瀬祓の重層構造に十分対応し、その基本の形がすでに出来上っていたことがわかる。

一方、地方行政の中心であった国府に同種の場合が形成されていたとみられている。その根拠の一つは、木製模造品は本来、都城的な祭祀の具であるとされている。例えば、但馬国府の推定地周辺の数カ所から人形・鳥形・斎串など木製模造品がまとまって出土している。

イ、万灯会

万灯会とは懺悔滅罪のために、多数の灯明をともして仏菩薩に供養する法会である。最も古い記事は、『日本書紀』の白雉二年（六五二）十二月にあり、朝廷が二七〇〇余りの灯明をともし經典を読ませている。『続日本紀』には、聖武天皇が天平十六年（七四四）十二月に金鐘寺と朱雀大路で一万灯を、天平十八年（七四六）には金鐘寺で一万五千七百余りをともし盧舎那仏を供養したとある。

この法会に用いられたとみられる土器が、高崎遺跡井戸尻地区と山王遺跡東町浦地区の二箇所で見られている。

高崎遺跡井戸尻地区は多賀城廃寺の西南約〇・五キロメートルの位置にあり、狭い範囲から杯を主体とした六四〇点にもよる土器群が集中して出土した。土器群はほとんど完全な形で廃棄されており、杯の内面に油煙状のものが付着した例が極めて多い点からすると、多量の灯明皿を使う万灯会などの儀式に用いられたものと推定された。

もう一箇所の山王遺跡東町浦地区でも同じような例が見られている。方格地割の西端付近で、東西大路跡の北一〇メートルにある小さな土壇（SK一六二）には、二〇〇点以上の土器が重なりあうように埋められていた。土器の種類や器種、年代、内面の油煙の付着などの様相は井戸尻地区とほぼ同じである。先にみた朱雀大路での例を参考にすれば、土器の出土地点の南に近接する東西大路で万灯会が執り行われたとみてよいであろう。

ロ、道饗祭

多賀城のすぐ南側、南門の西約二五〇メートルにある運河の堆積土から一点の木簡が発見された。長さ二八・五センチで、表に「□×百恠平安符未申立符」、裏には「□戌□□平□□×奉如實急々如律令」と記されている。木簡の年代は十一世紀頃と考えられている。頭部を山形に削

り、下端を尖らせた形状は呪符の典型的な形状である。その内容は百怪を鎮め除くための呪符で、未申いわゆる西南の方角に立てた符であるというものである。この木簡は道饗祭（都などの四隅に神を祭り、悪鬼の入り来るのを防ぐ祭）の時、艮（東北）角・巽（東南）角・乾（北西）角とともに坤（西南）角に立てられた符にあたる。平安京においては、内裏の四隅と京の四隅で行うものを四角祭、山城の国境で行うものを四角祭といった。

この「未申立符」は、多賀城の西南部分にあたり、城内へ侵入しようとする百怪の退散を願って行われた祭の時に、多賀城の四隅にたてられた符の一つかと思われる。

この道饗祭に関連して、その祭式構造が類似しているのが、鎮火祭である。鎮火祭は、宮城四方の外角で、卜部らが火を鑽って祭るもので、火災を防ぐための祭祀である。宮城四方の外角とは、宮城四隅のチマタで祀るものであった。この鎮火祭が地方の国府においても実施されていたことがわかる。すなわち下野国府跡出土の木簡（削屑）に「鎮火祭□□」と記されていた⁽¹⁶⁾。本木簡の出土した大溝は政庁から西南約三三〇メートルの地点であるので、かりに政庁を囲む方二〜三町の国庁域を想定したとしても、その外辺にあたる。本木簡の時期は、伴出した木簡に

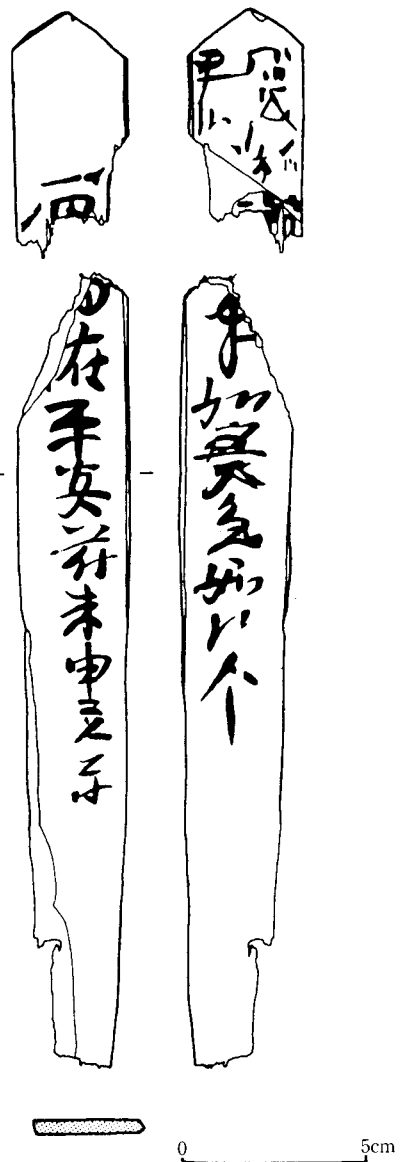


図13 呪符木簡「未申立符」
市川橋遺跡

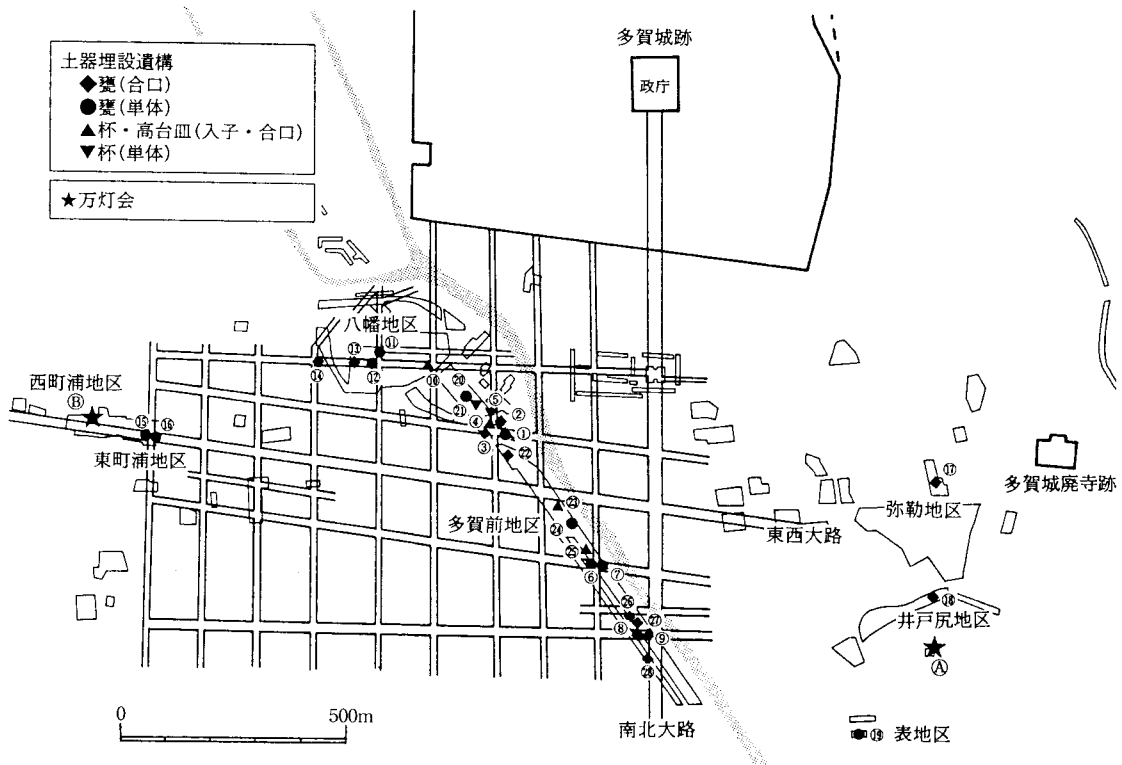
「里正」という郷里制下の職名がみえることから、七一七―七四〇年の間で考えられる。国府において、鎮火祭をその国庁四隅のチマタで執り行ったことが知られる。

ハ、土器埋設祭祀

穴を掘って土器を埋設した遺構が、道路の交差点で一三基、他の路上で三基、区画内で九基、方格地割の外で三基の計二八基が発見されている。

まず、区画内で検出した土器埋設遺構は、その年代は八世紀から十世紀までであり、その場所に施設を建設する際の地鎮などの祭祀にともなうものと思われる。

これに対し、道路部分で発見された埋設遺構は次のような特徴がみられる。第一点は、一六基中一三基までが交差点にあり、第二点は埋設時期が明確なものはすべて十世紀前半に限定され、しかも①②⑤については道路の造成工事中に埋設されていることが確認できる。以上の二点から、これらは辻を中心とした道路という特定の場所を意識して、限定された時期に計画的に行われた祭祀の遺構と考えられる。第三点として、道路以外の埋設土器は、土師器甕を使う場合、蓋として用いたものを除



土器埋設の遺構

	埋 設 状 況	地点(図中番号と対応)
交 差 点	土師器甕 2 個	合口 横位 ②⑭
	土師器甕と杯	合口 横位 ③
	土師器甕 1 個	横位 ①⑥⑦⑪⑫⑮⑯
	土師器高台皿 2 個	合口 正位 ⑩
	土師器杯 2 個	入子 正位 ④
	須恵器杯 1 個	正位 ⑤
路 上	土師器甕 2 個	合口 横位 ⑧⑨⑬
区 画 内	土師器甕 1 個	正位 ⑳㉒㉔
	土師器の甕と杯	入子 正位 ㉑
	土師器甕と須恵系土器杯	合口 正位 ㉖㉘
	土師器杯 2 個	入子 正位 ㉓
	土師器杯と須恵系土器杯	合口 正位 ㉕
	須恵器杯 1 個	倒位 ㉑
地 割 外	土師器甕 2 個	合口 横位 ⑰⑱
	土師器甕 1 個	横位 ⑲

図14 万灯会と土器埋設の遺構（『多賀城市史』第1巻より）

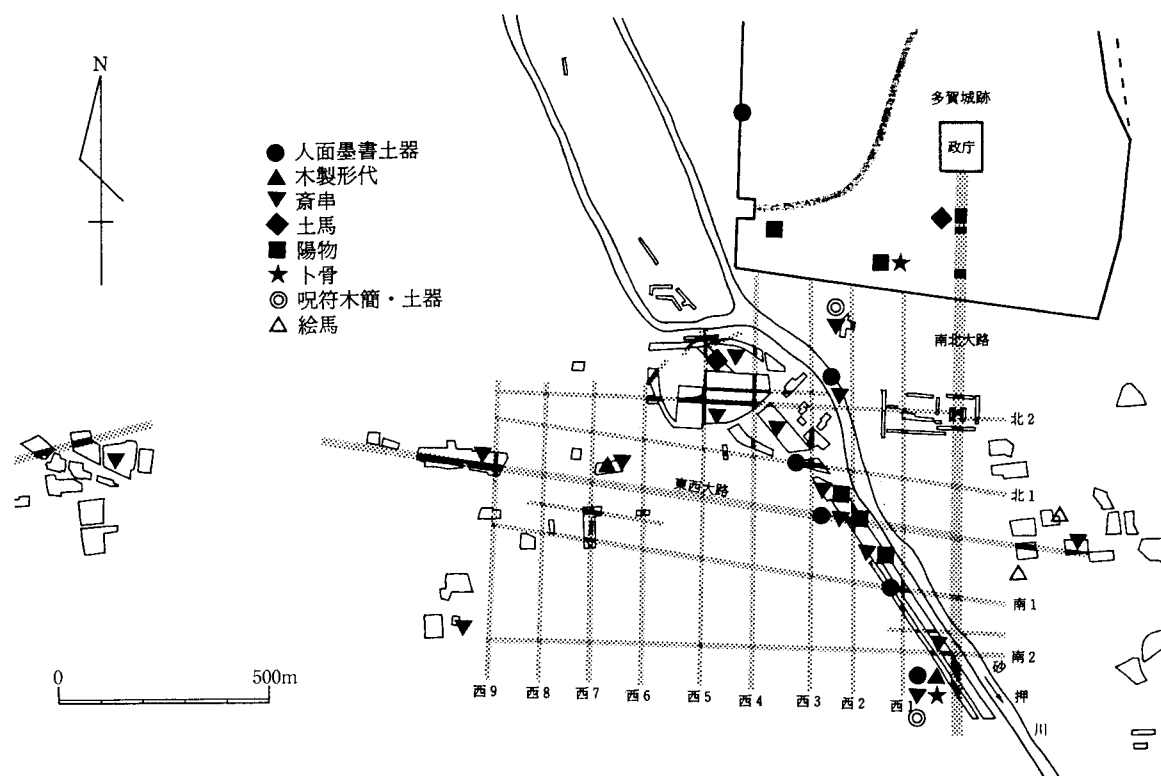


図15 祭祀具の出土地点（『多賀城市史』第1巻より）

けばすべて長胴甕で横位に設置されるという特徴がある。道路造成中に埋設されたものがあることを重視すると、これらの埋設土器は道路の建設・改修に関わる祭祀に用いられた可能性が高い。

古代の道と道とが行き合う所、例えば三叉路や四辻をチマタという。

先にあげた道饗祭は、元来はチマタにいるクナド、後にはヤチマタヒコ・ヤチマタヒメをも加えた三神に対し、饗応、奉幣して、外部から侵入して来る鬼魅を退散してほしいと願う祭祀であつたと考えられる。しかし、しだいに本来の意義が薄れ、卜部らが京城四隅の路上で祀るもので、外から来る鬼魅が京師に入らぬよう予め道に迎えて饗応するという祭祀となったという。

多賀城の街区の道路交差点に埋設された土器を伴う祭祀は、おそらくチマタ祭祀に深く関わるものと考えてよいのではないか。⁽¹⁷⁾

二、人面墨書土器

人面墨書土器は、土器に神の顔を描き、その土器（主に土師器の甕）の中に、罪・穢れや災厄の氣息を吹き込み、ともに川に流すのである。『延喜式』（神祇）四時祭大祓条には、小石の入った壺を天皇に供すると記されており、人面墨書土器に関連したものとされている。山王遺跡多賀前地区や市川橋遺跡で一〇〇点ほど出土している。これらの人面墨書土器がいずれも河川跡や東西大路の側溝を中心として発見されていることもこれを裏付けている。

ホ、木製形代・斎串

形代には人のほか鳥・馬・蛇などがある。

人形は人間の身代わりとして、穢れや災いを背負い、川や海に流されるものといわれている。馬形は人間の穢れを負った人形を他界へ運ぶために人形の傍らに立てられたとされている。

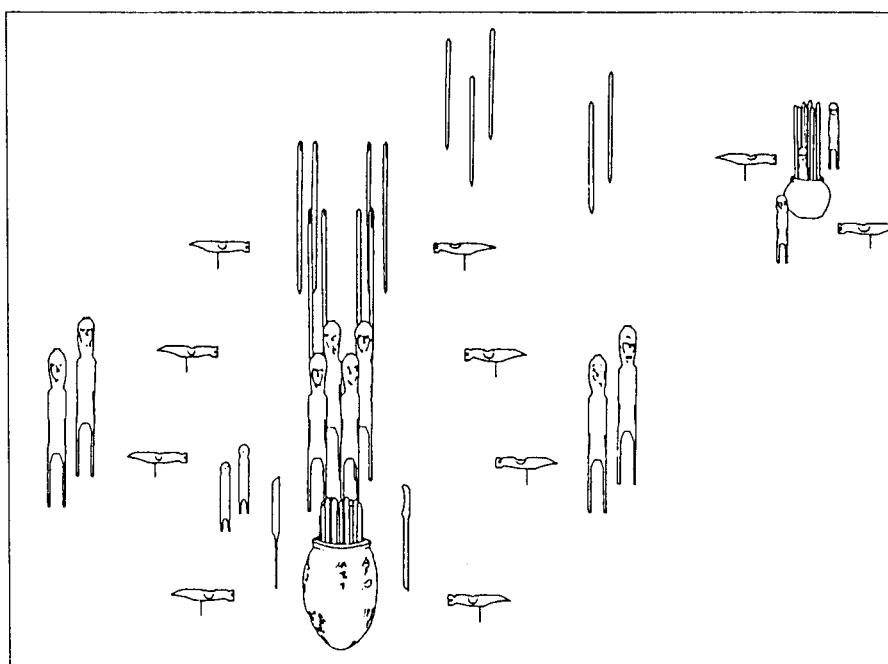


図16 山形県俵田遺跡祭場復原図（佐藤庄・「俵田遺跡の祭祀遺構」『えとのす』第26号 1985年より）

一方、斎串は細い板の下方を剣先状に尖らせ、上端部は尖頭形あるいは台形状に加工した串で、この串を立て、結界を表わし、外部の悪気を遮断するとともに、人形が負った罪穢を外に漏らさぬ役割も果たしたとされる。この斎串は多賀城の南面一帯から数多く出土している。

以上の人面墨書土器・木製形代・斎串などの祭祀具が、具体的にどのような組み合わせられて使用されたかを知る手がかりは、山形県八幡町俵

田遺跡で発見されている。遺跡は出羽国府とされる城輪柵跡の南東一・八キロメートルに位置し、旧河川の岸辺にあたる。五メートル四方の範囲内に人面墨書土器と須恵器の甕を核に、木製形代（二九点）、斎串（八七点）などの祭祀具がほぼ祭儀で使われたままの状態で検出された。『延喜式』神祇四時祭上には、大祓に四国の占部が穢れを負わせた人形を祓所に解除することがみえる。この祭祀遺構がまさに祓所にあたり、出羽国府が執り行った大祓の跡と考えられるのである。祭祀遺構の年代は、九世紀中頃とされている。

(6) 生産

イ、漆工房・鍛冶工房

漆工房は、山王遺跡八幡地区・市川橋遺跡・高崎遺跡井戸尻地区などに確認されている。八幡地区では漆容器としての土師器甕、漆液の乾燥・変質を防ぐフタ紙、漆塗り作業を記録した木簡など漆塗り作業に関わる遺物が集中的に発見されており、漆工房の存在を想定できる。フタ紙として使われたために遺存した漆紙文書には、国府で浄書された計帳歴名、天平五年または同十二年の戸口損益帳（前年籍との戸の異動・移住・死亡などを記載した帳簿）の草案、天平宝字七年（七六三）の具注暦（日々の吉凶・禍福などを記した暦）などがある（多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡―第17次調査―出土の漆紙文書―一九九五年〕。これらは国府・多賀城で作成・保管されていた文書が払い下げられ、フタ紙に利用されたものであるから、工房は多賀城と密接な関係をもつ官営工房と考えられる。

多賀前地区の東西大路に面した南区からも、漆付着土器・漆の漉し布・漆紙文書・漆刷毛などの漆関係の遺物や、鉄滓・鑄の羽口・送風管・砥石などの鍛冶関係の遺物がまとまって出土している。鍛冶については精錬鍛冶が行われていた可能性がある。この区画は国司館であり、これ

らの漆工房や鍛冶工房はその付属の工房か、臨時に置かれた工房かであろう。

このほか多賀前地区や市川橋遺跡館前地区では、河川跡から、解体の痕跡を明瞭に残すウマ・ウシをはじめとする多量の獣骨が出土している。牛馬の扱いについては養老厩牧令の中に詳細な規定があり、平城京や平安京では皮革生産などを目的とした官営の斃牛馬処理工房の存在が明らかになっている。多賀城外にも同様の工房が存在し、多賀城が関わっていた可能性が高い。また、多賀前地区では、これらの骨や角を利用した骨角製品の製作も行われており、動物の解体から皮革生産・骨角細工までの一連の作業が行われていた可能性が考えられる。

ロ、塩生産

松島湾沿岸の七ヶ浜町・塩竈市・松島町・鳴瀬町では、縄文時代から平安時代までの製塩遺跡が多数発見されており、古代だけで一三九箇所にはのぼる。奈良時代のもものは塩釜市新浜B遺跡の一箇所のみではすべて平安時代のものである。この状況から、少なくとも平安時代には多賀城の近くで盛んに塩作りの作業が行われたことが知られる。

ところで、多賀城跡から「……所出塩竈……」や「塩竈木運二十人」と記された製塩関係の木簡が出土している。これは本来同一木簡で九世紀のものである。「塩竈に使う燃料である木を運ぶ二十人」という意味で、製塩に使用する燃料の調達に関するものである。多賀城が、製塩作業自体を管理していたことを示す資料といえる。

ハ、製鉄

鉄は武器をはじめ工具・農具などの製造に不可欠の素材である。国府・多賀城周辺では、多賀城市柏木遺跡が良好な資料を提供してくる。⁽¹⁸⁾

柏木遺跡は、多賀城市大代五丁目に所在し、多賀城跡の東方約四キロ

メートルにあり、さらに多賀城跡西門の南を南下して市の中央部を貫流する砂押川の河口近くに位置している。本遺跡の立地する丘陵の斜面を利用して、大代横穴古墳群、樹形横穴古墳群などの多くの横穴古墳が造営されている。

精錬炉は四基検出されている。この四基の炉の形態は、基本的に円筒柱状の形をとる半地下式堅形炉と呼ばれているものに属している。このタイプの炉型は奈良時代初頭に認められ、平安時代まで継続することが知られている。福島県向田A・D遺跡、群馬県菅ノ沢遺跡等に類例を求めることができ、両者とも炉上部に方形の土壇が付属する特徴をもつ。これらは柏木遺跡と極めてよく似た構造をもち、基本的にこのタイプの炉型に付属する規格性をもった施設としてとらえることができる。

柏木遺跡では南北五〇メートル、東西四〇メートルの範囲にわたる丘陵斜面を段築状に造成して、製鉄炉、木炭窯、鍛冶工房跡などの遺構をコンパクトに配置している。本遺跡の製鉄炉の年代は、出土遺物の特徴から八世紀前半代とみられ、多賀城の創建年代に相当する。

このように、柏木遺跡は多賀城との位置関係、八世紀の歴史的背景なども総合して考えると、陸奥国府多賀城直営の製鉄所であったといえよう。

(7) 中世の多賀国府

多賀城跡内の発掘調査によって、その遺構はほぼ十世紀代に終末期を迎えているものと現段階で判断されている。そこで、近年、中世史の立場から、中世の多賀国府は、多賀城跡の近く、現在の仙台市岩切の地を中心として想定されている。

以下、齊藤利男氏が整理された中世都市としての多賀国府について引用しておきたい⁽¹⁹⁾〔中世の多賀国府〕参照〕。

岩切の地は、「奥大道」（中世の奥州街道）が冠川（七北田川）を渡る

水陸交通の要地に位置する。かつて奥大道は、岩切の東光寺・冠川明神（志波彦神社）の前で冠川を渡り、そこで北上する本道「奥大道」と古代多賀城の地へ向かう支道「おくのほそ道」に分かれていた。『留守文書』にある鎌倉時代の留守氏の譲状によると、中世の岩切付近には、冠屋市場「河原宿五日市場」という二つの市場があったことがわかる。

また、岩切を中心に、北の神谷沢（中世の紙屋）、利府（中世の村岡）、東の新田・南宮・山王・市川（古代多賀城の地）、南の余目一帯の地域は、中世において、「高用名（こうゆうみょう）」⁽²⁰⁾という名の所領に編成されていた。そこは、かつての多賀城を取り囲む領域で、陸奥国留守職をもつ留守氏が高用名全体の地頭であった。また「こうゆう」の名も「国府用（こふよう）」に由来するとみられ、国府一帯の特別行政区として建てられた所領と考えられている。

多賀国府において「府中」といわれたのは、「境の祭祀」をとり行つたと考えられる東宮・西宮・南宮・北宮に囲まれた広大な領域である。すなわち、東宮は塩竈浦の入口にあたる東宮浜に、北宮は利府の北、奥大道に置かれた「勿来の関」東側の丘陵上にあり、南宮も古代多賀城の南に「南宮」の地名が残る。また西宮とは、古代から岩切の地にあった式内社志波彦神社（冠川明神）のことであった。いずれも多賀国府へ向かう水陸交通の要地に位置し、国府周辺の寺社・工房・居館なども、すべて四つの神社に囲まれる範囲に含まれていることがわかる。中世においても、大都市京都・鎌倉では、都市の人口で境界祭祀（四角四境祭など）を行い、疫病やケガレを都市域から追放する思想があったのである。岩切の北を取り囲む丘陵は、中央部が国衙在庁官人の守護神の鎮座する聖地であり、丘陵の東西の端にあたる一帯は、人々の靈魂があのかかる。とくに後者の「都市の霊地」の存在は、鎌倉や遠江国府（見附）など主だった中世都市にみられる特徴であるという。

(8) 諸要素の整理

多賀城跡の南面を中心とした地域の発掘調査によって、「都市」の条件と考えられる数多くの成果が得られたのである。ここに、それらの条件をもう一度整理してみたい。

イ、道路網と街区の設定

多賀城跡外の南西部にあたる微高地では、道路網は、幅約二三メートルの南北大路や幅約一二メートルの東西大路と、これらと平行あるいは直交して縦横に走る幅三〜八メートルの多数の小路によって構成されている。

多賀城外の道路網は大きく三段階の変遷を経て、整備されている。とくに九世紀初頭頃に行われたⅡ期の整備では、東西大路を中心として、一辺が一〇〜一四〇メートルの平行四辺形の区画を単位とした方格地割Ⅱ町並が成立した。さらに、Ⅲ期の九世紀後半頃には地割の範囲は南北に拡大し、やや変形ではあるが、碁盤状の地割が完成した。

ロ、地区構成

地割内部は、部分的に畑地として利用されているが、大部分は掘立柱建物跡・竪穴住居跡などを配置する地域として使われたようである。東西大路に面した区画では、山王遺跡千刈田地区や多賀前地区に国司の館があり、上級官人の住居地域とみられる。これらの敷地は一町四方の区画全体を占めている。一方、大路からやや離れた地域では陸奥国内の郡に関わる施設や工房、下級官人の住居が置かれている。

ハ、水陸交通と港湾

行政と物資流通を推進するためには、交通路と港湾施設の整備が不可

欠である。

まず、主要官道とそのアクセスと港湾については、多賀城外前面の道路網の整備状況は先にみたように発掘調査によって明らかにされたが、多賀城周辺の広範囲な地域はほとんど不明である。わずかに中世の多賀城周辺の状況から古代の姿を類推するしかない。

中世には「奥大道」は、現在の仙台市岩切の冠川明神（延喜式内社志波彦神社）の前で冠川（七北田川）を渡り、そこで、北上する本道「奥大道」と古代多賀城の地へ向かう支道「おくのほそ道」に分かれていた。一方、水上交通と港湾は、次のようにみられている。多賀城の東門から出ると、道は塩竈浦に通じている。そこは陸奥国一宮塩竈神社の所在地であり、塩竈津は陸奥国の「国府津」たる重要な港であった。

国府関連の港には、もう一つ、冠川の河口に開けた「湊浜」があった。多賀城跡の南面の発掘調査で検出された十世紀前半とみられる運河状遺構は、多賀城から南の入海へ続く水路と考えられる。

二、祭祀

律令的祭祀は、神祇令に規定された、国家的祭祀のことをいい、地方においては、国府や郡家などでも盛んに実施され、周辺の村落祭祀と異なる状況を呈していたと考えられる。

都の朱雀大路で行われた万灯会は、多賀城前面の東西大路や多賀城廃寺近くで実施されている。また、道饗祭と呼ばれる祭祀は、外から来る魍魎が、京都に入らないよう、道で迎えて饗遇するものである。都城の四隅の道は境界として祭祀の場と定められた。多賀城外の西南部から出土した「未申立符」と記された木簡は、城内へ侵入しようとする百怪の退散を願って行われた祭祀の時に、多賀城の四隅にたてられた道饗祭の符の一つと考えられる。

一方、律令的祭祀に係わる遺物とされる墨書人面土器・土馬・人形・

斎串などが、多賀城の南面各所から数多く出土している。これらは、多賀城南面の方格地割の中で盛んに律令的な祭祀が執り行われたことを示している。

ホ、生産

都市においては、各種の生産機構を集中して設定・管理し、都市民の多量消費と流通に対処したと考えられる。

多賀城の町並の中には、漆作業や鍛冶に関わる遺物、解体された牛馬骨、骨角器の未製品などの遺物が、それぞれ集中して出土し、それぞれの工房の存在が想定される。また、多賀城周辺には、大規模な製鉄や製塩関係の生産遺跡が確認されている⁽²¹⁾。

この他、中世の多賀国府の周辺に設定されたとする「都市の霊地」については、古代における多賀城周辺における墳墓群の所在が、今後の発掘調査によって確認されることを期待したい。なお、参考までに、大宰府の場合は、宮ノ本遺跡をはじめとする大宰府周辺に形成された墳墓群は、一般的には高位の官人一族の墳墓群と理解されている。また、肥前国においては、久池井B遺跡、泉三本栗遺跡をはじめ、その近在に集中する当該期の墳墓遺跡は、佐賀市北端部と大和町の微高地に位置し、そこから見える平野部に肥前国府が存在している。そのことから、これら墳墓群は、肥前国府に關与する官人の奥津城であるとされている⁽²²⁾。

③多賀城と都市概念

以上のように多賀城に関する古代都市の構成要素を列記してみた。しかし、こうした要素を包括するようなより本質的な問題について、最後に検討しておきたい。その点について、歴博の共同研究「古代の国府の研究」の総括シンポジウム（一九八七年三月）を踏まえて、井上満郎氏

が次に示すような大きな疑問を提示された。⁽²³⁾ この井上氏の疑問は、多賀城また国府を「都市」とみなす見解にとって、検証しなければならない重要な問題である。

(1) 都市規制—井上満郎氏の疑問

井上満郎氏は、国府における都市規制について、次のように指摘している。

都市という歴史的名辞は、その重要な一部分として境界概念をふくむ。都市地域は、そうでない地域となんらかの要素によって区分されていなければならない。例えば、平安京は、大路・小路の広狭、京内の清掃、家屋の建築、街路樹の設置、水田耕営の禁止、行路病者等の処置、堀川の維持、等々とさまざまな都市規制がもうけられていた。こうした都市規制が、平安京を宮都として維持するためのものであったことはいまでもなく、この都市規制が存在するがゆえに平安京は平安京以外の地と区別される地域、すなわち都市であったといえる。少なくとも、国府にもなんらかの都市規制があれば、国府を都市と認識できるはずである。

任国への入口と館の入口の二箇所以外になんらかの境界を示す記載はない。国司の任務や執務にとって、国府「域」は存在しなかったと考えられるのである。結局、国内には郡という行政区画から切り離されたいかなる区画も存在しておらず、つまりは国府には都市規制は存在しないのであって、国府を古代都市とは考えられないということになる。

(2) 多賀城前面地区における方位規制

八世紀後半のⅠ期に政庁中軸線に一致する南北大路と、南辺築地に平行する東西大路が造られると、両大路の方向がその後南北・東西小路を設置する際の基準となっていくのである。⁽²⁴⁾

八世紀段階の建物等の方向も注目される。山王遺跡八幡地区で発見さ

れた掘立柱建物跡・堅穴住居跡の方向は一定で、政庁中軸線と一致する。また、高崎遺跡弥勒地区でも堅穴住居跡の方向が一定で、地形の傾斜に沿うことなく真北からやや東に偏した方向をとっている。もう一つの調査区、多賀城跡外郭南辺築地西半部の南地区では、A期(八・九世紀前半頃)の建物等は多賀城の外郭南辺築地にほぼ一致し、B期(十・十一世紀頃)の大規模な溝や道路状遺構は、多賀城の政庁中軸線にほぼ一致する。

以上の例は、多賀城や多賀城廃寺から何らかの規制を受けた結果と考えられる。

一方、多賀城から離れた新田遺跡の遺構の方位を確認してみたい。⁽²⁵⁾

SX八五〇道路跡の南側約一六メートルの地点でSD一一七八溝跡、約三三メートルの地点でSD二七八溝跡、約三三メートルの地点でSD一一七九溝跡の間は道路跡であり、両溝跡はその北側溝と南側溝であった可能性が高い。SX八五〇廃絶後、その南側に新しい道路(路幅約一九・一〇メートル)が作られている。新田遺跡の道路跡も山王遺跡のものと同様に灰白色火山灰降下後まで存続していた可能性が高い。

ところでSX八五〇道路跡は、多賀城の政庁中軸線・外郭南辺のいずれの方向とも一致していない。山王・新田遺跡で発見した二条の道路跡は方向が異なるものの同一の道路である可能性が高く、多賀城に近い範囲はそれに強く規制され、本遺跡のようにやや離れた地域になると地形に合わせてつくられたものと推定されている。

(3) 多賀郡・宮城郡・多賀郷

宝亀年間の征討が不調に終わった後をうけて、延暦二年(七八三)、蝦夷の騒擾を理由に征討を企て、持節征討將軍に大伴家持が任ぜられている。その家持の在任中の業績を伝える唯一の史料である『続日本紀』延暦四年(七八五)四月辛未条には次のようにみえる。



①【宮城】 須恵器高台坏底部外面
多賀前地区遺(や)り水遺跡
9世紀前半



②【宮郡】 須恵器坏底部外面
多賀前地区大路北側溝 9世紀前半



③【階上】 須恵器坏底部外面
多賀城跡 9世紀前半

図17 墨書土器

中納言從三位兼春宮大夫陸奥按察使鎮守將軍大伴宿祢家持等言。名取以南一十四郡。僻在_二山海_一。去_レ塞懸遠。属_レ有_二徵発_一。不_レ會_二機急_一。由_レ是權置_二多賀_一、階上_二二郡_一。募_二集百姓_一。足_二人兵於国府_一。設_二防禦於東西_一。誠是備_二預不虞_一。推_二鋒万里_一者也。但以。徒有_二開設之名_一。未_レ任_二統領之人_一。百姓願望。無_レ所_レ係_レ心。望請。建_二為真郡_一。備_二置官員_一。然則民知_二統攝之帰_一。賊絶_二窺竄之望_一。許_レ之。

この条の内容はおおよそつぎのようである。名取以南の一四郡は陸奥国北部の城柵などから遠いため、緊急の徵発等の時には間に合わない。そこで、国府の近くに多賀・階上(しなかみ)の二郡(権郡)を置き、百姓を集住させた。しかし、郡としての組織はととのえていなかったのだ、このたび、権郡を真郡として人員を配置し、郡としての機能をはたしうるよう、つまり緊急の対応が十分出来るようお願い出て許されたのである。

この施策は皆麻呂の乱(宝龜十一年(七八〇))の衝撃とその後の騒擾状態に対処して、多賀城と陸奥国北部の防備を目的とした措置と考えられる。

この多賀郡はこれ以降の史料には一切見えない。『延喜式』(神名)には宮城郡に「多賀神社」があり、『和名類聚抄』では国府所在郡を宮城郡として、その宮城郡の郷名に「多賀郷」「科上(しなかみ)郷」がみえる。

宮城郡―(郷名)赤瀬・磐城・科上・丸子・大村・白川・宮城・余戸・多賀・柄(栖)屋(元和古活字本による)⁽²⁶⁾

ところで、宮城郡の初見は『続日本紀』天平神護二年(七六六)十一月己未条である。

一方、『続日本紀』天平勝宝四年(七五二)二月丙寅条には「陸奥国調庸者。多賀以北諸郡令_レ輸_二黄金_一」とある。この「多賀以北諸郡」という表現は、「名取以南一十四郡」(『続日本紀』延暦四年(七八五)四

月辛未条)、「黒川郡以北」(『続日本紀』天平十四年(七四二)正月己巳条)、「黒川以北奥郡」(『類聚三代格』大同五年(八一〇)二月二十三日官符)などの例でもわかるように、「多賀城以北諸郡」ではなく、「多賀郡以北諸郡」の意であると考えられる。すると、天平勝宝四年の時点で真郡・多賀郡が存在したことになる。さらに推測するならば、その後、まもなく、宮城郡が成立し、皆麻呂の乱の多賀城攻略を機に、宮城郡とは別に権郡としての多賀郡・階上郡が置かれ、さらに延暦四年の時点で権郡から真郡にすることが許された。これはおそらく宮城郡の中に多賀城の地を中心として多賀郡・階上郡が設置されるという形をとったと考えられる。そこで、まもなく多賀城周辺の情勢の安定下で、多賀・階上の二郡は廃され、宮城郡の多賀郷・科上郷となったのではないだろうか。このような推測は、「宮城」郡の地名が尋常ではなく、「多賀城」成立後、それに因むものであると考えれば、より妥当性を強めるであろう。東北の城柵全般において八世紀半ば以降に「柵」から「城」への用語の変化がみられ、多賀城も同様とみてよいであろう。そして「多賀柵」(『続日本紀』天平九年(七三七)四月戊午条初見)ではなく、多賀城(『続日本紀』宝龜十一年(七八〇)三月丁亥条初見)ではあるが、多賀城碑によれば、天平宝字六年(七六二)の時点で確認できることになる)の成立後となると、宮城郡の成立時期は八世紀半ば頃、下限を宮城郡の初見記事の天平神護二年(七六六)と考えられるので、上記の推測も十分に成り立つであろう。

また、上記の見方を変えてみるならば、天平勝宝四年時の宮城郡成立前の多賀郡はともかく、宮城郡成立後、別に設置された権郡・多賀郡は『和名類聚抄』の宮城郡内の多賀郷に相当すると理解できるのではないか。

心地)、南の余目(余部)一帯の地域は、「高用名」という名の所領に編成されていた。この高用名について、大石直正氏の興味深い指摘がある²⁷⁾。すなわち、高用名は鎌倉時代にすでに「たかもちの名」とも「かうゆふみやう」ともいわれているが、本来は後者で、「国府用の名」すなわち国衙に附属する名の意味であったと思われる。この名は、鎌倉時代には在庁官人の統率者である留守職を世襲する留守氏の所領であった。留守職そのものが平安時代にさかのぼるものであることは確実であるから、留守職と高用名の関係も平安時代以来のものとは推定されるという。

結局のところ、多賀郡・宮城郡を経て、権郡の多賀郡・階上郡の領域は、『和名類聚抄』宮城郡の多賀郷・科上郷に継承され、やがて留守職による高用名(国府用の名)という形で、国府一帯の特別行政区として建てられた所領に引き継がれていると考えられる。

(4) 城柵と城辺²⁸⁾

城柵の修理について、養老軍防令城隍条ならびに縁辺諸郡人居条に次のように規定されている。

○凡城隍崩壊者。役兵士修理。若兵士少者。聽役随近人夫。遂に閑月修理。其崩壊過多。交關守固者。隨即修理。役訖。具録申太政官。所役人夫。皆不得過十日。

○凡縁東辺北辺西辺諸郡人居。皆於城隍内安置。(中略)其城堡崩壊者。役当処居戸。

城の堀の修理には兵士、兵士が少ない場合は近辺の人夫を役し(大宝令では兵士が少ない場合、人夫を役す)、城堡の修理には当処の居戸を役することとしている。

この軍防令の規定の実施例は、次のとおりである。

○『続日本後紀』承和十年(八四三)四月丁丑条

陸奥鎮守將軍從五位下御春朝臣浜主言。健士元勲位人也。既脱調

庸。亦無課役。(中略)而勲位悉尽。無人充行。仍任格旨。差行白丁。全給公糧。兼免調庸。人同役異也。請射下健士。准兵士下兵。同令役修理城隍。許之。

この例からも、軍防令城隍条でいう兵士は実際、上兵・下兵の区別があり、城隍修理に従事したのは専ら下兵であることがわかる。⁽²⁹⁾

城柵造営はもちろんのこと、城柵の修理には、おそらく鎮守府の指揮下で番上兵士(下兵)および城下の民などを動員しているのである。

いうまでもなく、城柵には柵戸や帰降の夷俘が置かれたのである。この柵戸が調庸を復されて移住したことは史料上明らかである。また『類

聚国史』延暦十九年(八〇〇)五月戊午条に、

陸奥国言。帰降夷俘。各集城塞。朝参相統。出入寔繁。夫馴荒之道在威与徳。若不優賞恐失天威。今夷俘食料充用不足。伏請佃卅町以充雜用。許之。

とあるように、帰降の夷俘らは城制下では、夷俘料の支給をうけていたと思われる。このように考えるならば、七世紀後半における当初の城柵関係史料にみえる「柵養蝦夷」(『日本書紀』斉明天皇四年(六五八)七月甲申条)、「城養蝦夷」(『日本書紀』持統天皇三年(六八九)正月丙辰条)なども同様に夷俘料の支給をうけていた蝦夷の意と理解できよう。城制とは調庸を免除された柵戸や夷俘料などの支給をうけた帰降夷俘などを主体として構成されていたのではないだろうか。

○『日本後紀』延暦二十三年(八〇四)十一月癸巳条

出羽国言。秋田城建置以来册余年。土地墾墾。不_レ宜_二五穀_一。加以孤居北隅。無_レ隣相救。伏望永從停廢。保_二河辺府_一者。宜_レ停_レ城為_レ郡。不_レ論_二土人浪人_一。以_二住_レ彼城者_一編附焉。

この条の後段部分の解釈は次のようになる。「住_レ彼城者」は秋田城制下の民という意味で、土人浪人を問わず、城制下のすべての民を令制の郡に編附しようとしたのであろう。すなわち、城制段階はいわば国

府直轄で、城制下の民に対して調庸免除や夷俘料の支給を行い、おそらくそれ以前は城柵の修理などにはかり出されていただろうが、一定の期間を経て、令制の郡へ移管することによって城制下の住民は、はじめて全面的課役対象として編附されたのではないだろうか。宝龜十一年(七八〇)に秋田城制下の夷俘らが、「已等挾_二憑官威_一。久居_二城下_一」として秋田城の停廢に反対した(『続日本紀』宝龜十一年八月己卯条)事由もこの点にあったのであろう。

(5) 国府所在郡の国府と郡家

○『出雲国風土記』卷末記

又、西のかた廿一里にして国の序、意宇の郡家の北の十字の街に至り、即ち、分れて二つの道と為る。

○同卷末記

意宇の軍団 即ち郡家に属(つ)けり。

○意宇郡条

黒田の駅 郡家と同じき処なり。郡家の西北のかた二里に黒田の村あり。土の体、色黒し。故、黒田といふ。旧、此処に是の駅あり。即ち号けて黒田の駅といひき。今は郡家の東に属けり。今も猶、旧の黒田の号を追へるのみ。

出雲国府と国府所在郡の意宇郡家は、同所に所在し、意宇軍団は郡家に置かれ、さらに黒田駅も同所に置かれたとされる。すなわち、意宇郡の地に国府・郡家・軍団・駅家が集中して存在したことが明らかである。

一方、郡家所在郡の郡家とその郷の關係はどうであろうか。

この点について、中村順昭氏は『和名類聚抄』にみえる郡家郷に注目し、次のように指摘している。⁽³⁰⁾

『和名類聚抄』には、「郡家郷」と称する郷が六か国の一五郡に存在している。郡家郷の呼称は、郡の行政施設である郡家の所在に基づくもの

である。その郡家の存在にともなう戸として想定されるものは、①郡司、②郡司職分田の耕作にあたる人、③郡雑任などとしている。

この郡家郷という名称をもたないものの、郡名と同じ郷＝郡名郷も郡家所在郷であるが、郡家所在郷が、他郷と異なる扱いをうけたことを示す出土文字資料を二例紹介しておきたい。

一例は中村氏の指摘する郡司職分田の耕作に関わる格好の資料と考えられる福島県いわき市荒田目条里遺跡出土のいわゆる郡符木簡（第二号木簡）である。⁽³¹⁾郡司が里刀自に命じて、五月三日に郡司の職田の田植えのために、里（郷）の農民三六人を召し出したものである。里刀自は、里長の妻と理解した。

本遺跡は、広大な荒田目条里遺構に隣接していること、郡家の中心施設の置かれた根岸遺跡の西北に位置し、郡家所在郷である磐城郷に相当すると考えられる。また本遺跡出土の人面墨書土器に「磐城郡磐城郷支部手子磨召代」と記されていた。すなわち、磐城国造の系譜を引く大領於保磐城臣は、その郡司職田を荒田目条里内に有し、従来からの強い支配関係に基づき、郡司職田の田植の労働力として磐城郡家所在郷・磐城郷の里刀自に命じたとすれば、里名省略の意味も肯づけるであろう。通

常、郡符木簡は、例えば「符春部里長等」（兵庫県春日町山垣遺跡木簡）などと里名を明記するのである。

もう一例は、岩手県水沢市胆沢城跡出土の漆紙文書である。⁽³²⁾

第四三号漆紙文書

〔本紙〕（左文字）

× 年廿三

………（紙継ぎ目）………

× 年卅一

□

× 年廿三

× 巫部 〔酒力〕 曆年 ● 六

× 部國益年 ● 二

× 部 曆年 廿六

× 阿伎磨年 廿八 ×

×、駒椅郷八戸主 ● 部人永 □ □ ×

、高椅郷廿五戸主刑部人長戸口

× 駒椅郷十七戸主 ● 部本成戸口

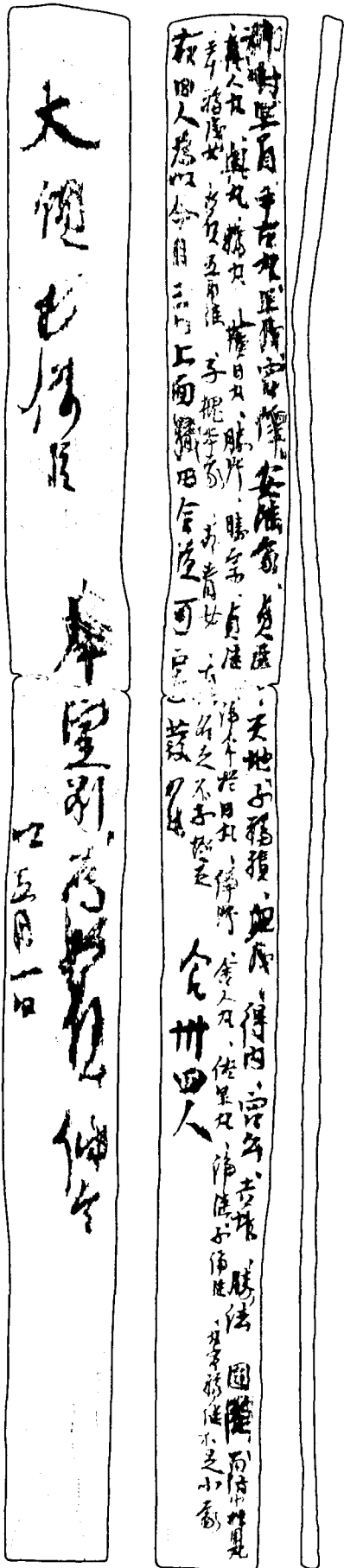
、瀦城郷五十戸主吉弥侯部黒磨戸

駒椅郷 ● 八戸主 ● 部諸主戸口

、瀦城郷卅八

、駒椅郷廿一戸主文部大磨戸口

、衣前郷 □ ×



◀ 図18 いわき市荒田目条里遺跡 2号木簡実測図 [2/5]

×清成年五×
×繼年□×
(開元)

〈別紙〉(正位文字)

×年廿二

×高椅郷□四戸主刑部眞清成戸口
×駒椅郷廿一戸主文部大磨戸口

この文書断簡は陸奥国柴田郡から胆沢城へ貢進された歴名簿である。

本断簡は郷名を一〇例知ることができるが、駒椅郷五例、高椅郷二例、瀞城郷二例、衣前郷一例で、四郷に限られている。軍団編成は、この資料による限り、郡単位に一旦、兵士の出身郷をばらしたうえに再編成しているゆえに、断片でも一定の傾向を把握できるといえよう。二十巻本の最古写本である高山寺本の六郷のうち、柴田郷・新羅郷がこの断簡にはみえない。柴田郷は郡名を負う郷名で、郡家所在郷である。新羅郷は『類聚国史』巻百五十九、天長元年(八二四)五月己未条の「新羅人辛良。金貴賀。良水白等五十四人。安置陸奥国。依法給復。兼以乗田充口分」に基づき、新たに設置された郷であるとみられる。新羅郷

表 柴田郡の郷名

刊本	高山寺本	大東急文庫本
柴田郷 衣前郷 高橋郷 瀞城郷 餘戸郷 駒橋郷 新羅郷 小野郷 驛(驛)家	柴田郷 衣前郷 高橋郷 瀞城郷 新羅郷 駒橋郷	柴田郷 衣前郷 高橋郷 瀞城郷 餘戸郷 駒橋郷 新羅郷 小野郷 驛(驛)家

は、新羅人を安置したもので、賦役を免ずる措置がとられているのである。ここで問題となる柴田郷は、本資料があくまでも断簡ゆえに断定はできないが、やはり郡家所在郷は先にみたような郡司職田の耕作など、他郷と異なる負担を想定できるだけに、胆沢城への上番から除かれたのではないか。

国府の構成員の中心になる国司が中央からの派遣官であるゆえに、国府こそ、その維持に国府周辺に集住した人々の労働力提供が不可欠であったであろう。つまり、国府施設維持と生産・流通機能を促進するために、人々を集住させ、周辺を整備し、一定の領域を設定する必要があるであろう。しかも『出雲国風土記』でみたように、国府に接して郡家・軍団・駅家などの諸施設が集結しているだけに、国府所在郡そのものが他郡と異なる存在であったことは間違いない。⁽³³⁾

以上の点を総合的に判断するならば、多賀城は、いまだ不確定要素を含みながらも、古代の都市の諸条件をほぼ満たしており、多賀城を古代地方都市とみなすことができるであろう。一方、一般諸国の国府については、現段階では、その中心施設を中心とした発掘調査にとどまっており、広範囲の周辺調査にまで至っていない。そうした状況下では、以上の多賀城の諸条件が、多賀城の特殊性と結論づけられるか、ある程度、一般諸国の国府に及ぼしうるかは、現段階では結論づけがたいので、今後の課題としておきたい。

末筆ながら、本稿を草するにあたり、宮城県教育委員会の高野芳宏氏・菅原弘樹氏・吉野武氏・多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏には、多賀城跡の前面地区の発掘調査成果について種々御教示いただきとともに、その調査報告書から全面的に引用させていただいたことを記し、厚く謝意を表したい。

註

- (1) 鬼頭清明「都市の概念と国府」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二十集、一九八九年。
- (2) 国立歴史民俗博物館「シンポジウム「古代の国府」」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二十集、一九八九年。
- (3) 本稿の第二章の多賀城前面地区にかかわる発掘調査成果のまとめについては、宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会・多賀城市埋蔵文化財調査センターから刊行された報告書および『多賀城市史』第一巻に収められた「古代都市多賀城」(高野芳宏・菅原弘樹氏執筆)から全面的に引用させていただいた。それぞれの引用箇所に出典を明記していないことをお断りしておきたい。
- (4) 仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅰ』一九八一年・『郡山遺跡Ⅱ』一九九七年。
- (5) 宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅳ』一九八〇年など。
- (6) 古川市教育委員会『名生館遺跡Ⅶ』一九八七年など。
- (7) 鹿トは骨ト、骨トに使用した獣骨をト骨と呼んでいる。ちなみに現在までに知られた資料はト骨百十六点である。ト骨では鹿の肩胛骨が多数を占めるのは事実であるが、イノシシ、イルカ、ウマなどの骨も少なくない。
- (8) 最近では各地で急速に発見例が増え、ト骨は弥生時代から奈良・平安時代まで、ト甲は古墳時代後期、飛鳥・奈良時代までの遺物が発見されているのである。そうなるト骨ト甲も、従来考えられていた時代よりはるかに古くまで遡るのみならず、いわゆる「わが国では古くは鹿トであったが、のちに亀トがとって代った」という通説は完全に否定されるに至った。
- (9) 古墳時代後期の、神奈川県三浦市の間口遺跡や長崎県佐岐の串山ミルメ浦遺跡の例、奈良時代初頭と思われる神奈川県の大磯遺跡の例と年代順に比べてみると、強い関連性が窺われるであろう。
- (10) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八五 多賀城跡』一九八六年。
- (11) この木簡については、拙稿「多賀城市山王遺跡出土の木簡について」(山王遺跡―第九次発掘調査報告書―一九九一年)に詳しく述べているので参照してほしい。
- (12) 多賀城市教育委員会『館前遺跡―昭和五十四年度発掘調査報告―』一九八〇年。
- (13) 吉野 武「宮城・山王遺跡」『木簡研究』第一六号 一九九四年。
- (14) 館野和己「相模国調部と東大寺領東市庄」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』真陽社 一九八八年。
- (15) 多賀前地区では、「宇多」「宇」など宇多郡とみられる墨書土器が集中して出土し、この場所に宇多郡と関係をもつ施設があったことが推定されている。
- (16) 齊藤利男「多賀国府の都市プラン」『よみがえる中世(7) みちのくの都 多賀城・松島』平凡社 一九九二年。
- (17) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八〇 多賀城跡』一九八一年。
- (18) 律令的祭祀の概要については、金子裕之「平城京と祭場」(国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第七集) 一九八五年。
- (19) 栃木県教育委員会『下野国府跡Ⅳ―昭和五十六年度発掘調査概報―』一九八二年。
- (20) チマタで行われる呪術的な祭祀にタ占がある。タ占とは、夕暮、チマタに立ち、道行く人の言葉によって、吉凶を占う方法である(和田幸「タ占と道饗祭」チマタにおけるマツリと祭祀)『季刊日本学』第二巻第二号、一九八四年。
- (21) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査報告書第一七集 柏木遺跡Ⅰ』同『柏木遺跡Ⅱ』一九八九年。
- (22) 齊藤利男註(13)に同じ。
- (23) 「高用名」に関する見解は、大石直正「中世の黎明」(小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』東京大学出版会 一九七八年)。
- (24) 塩竈・松島湾の湾口にあたる宮城郡七ヶ浜町花淵浜の先端に、延喜式内社鼻節神社がある。その神社に「国府厨印」(方一寸三分(約四センチ))という印文の銅印が明治初年の社殿修復の際に発見され、伝世されている。この印は、花淵浜の地が多賀国府の御厨にあたり、昆布・鮑などの海産物を国府に供給していたことを示し、その出納に際して用いられていたものではないかとされている。花淵浜の大根暗礁が昆布の南限とされているが、昆布は、古代の陸奥国例貢の貢の一つにあげられ、蝦夷の貢納品としても知られている。鼻節の神は、北の海を舞台とする海民(蝦夷)の活動の拠りどころであり、それ故に、塩竈の神に先立って、式内社の一つにも取り立てられていたのではなかろうか。「国府厨印」の存在も、そのような広がりの中に位置づけられていたべきであるという(大石直正「国府厨印の謎」『よみがえる中世(7) みちのくの都 多賀城・松島』平凡社 一九九二年)。大石氏は偽作説もある「国府厨印」についてこのように積極的に評価している。本論に引きつけて考えるならば、製塩・製鉄などに加えて海産物も、多賀城の管轄する生産体系の中にきちんと位置づけられているといえよう。
- (25) 狭川真一「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景―北部九州を中心として―」『貿易陶磁研究』No.13 一九九三年。
- (26) 井上満郎「国府と都市規制」(『古代文化』第三九巻第一〇号) 一九八七年。
- (27) II期に出現した北2・3間道路と皿期の北2・南2の東西小路・南1・2間道路は南北大路に直交している。これは道路建設以前に政庁中軸線や南の水田と一致する方向が存在し、それに規制されたためとされている。
- (28) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『新田遺跡(第4・11次調査)』一九九〇年。

- (26) 宮城郡の郷名のうち、磐城・白川両郷はいままでもなく、陸奥国の南部の海道・山道の大都である磐城郡・白川郡からの移民を意味している。特に白川郷は、『和名類聚抄』によれば、宮城郡白川郷・黒川郡白川郷・胆沢郡白河郷の三郷が存在する。白川(河)郷の置かれた三郷は、実は陸奥国内でも最も重要な箇所である。すなわち、陸奥国府の所在郡としての宮城郡、鎮守府の所在郡である胆沢郡、そして陸奥国北部への入口にあたり、「黒川郡以北十一郡」「黒川郡以北奥郡」などと表現される黒川郡の三郡である。陸奥国の本来の入口にあたる白河郡は白河軍団も置かれた軍事的拠点であった。磐城郡も磐城軍団の置かれた海道のと要地であった点も加えると、宮城郡に「白川郷」「磐城郷」が置かれたのは、軍事的措置と判断できよう〔拙稿「古代の白河郡」(福島県教育委員会「関和久遺跡」一九八五年)〕。
- (27) 大石直正註(20)に同じ。
- (28) 城柵の造営・修理に主体が何かという点に関しては、拙稿「古代における東北の城柵について」(『日本史研究』二三六号、一九八二年四月)で詳しく論述しているので参照してほしい。
- (29) 『三代実録』元慶三年(八七九)三月二日条。
正五位下守右中弁兼行出羽権守藤原朝臣保則飛駟奏言曰。(中略)臣等用古老之言。選諸国当土之軍。为上兵者一千人。分置配官人。令其勞賜。但當土之卒。縁无甲冑。不能輒進。交雜諸国之軍。令増兵衆之勢。其中国下兵担夫。役立柵之事。還向本国。此事由趣。上奏先畢。(後略)
- (30) 中村順昭「郡家の所在と郷の編成」『和名類聚抄』にみえる郡家郷をめぐって――『史叢』第五四・五五合併号 一九九五年二月。
- (31) 拙稿「木簡が語る古代のいわき」(いわき市教育委員会『荒田目条里遺跡木簡調査略報 木簡が語る古代のいわき』一九九六年。拙稿「里刀白小論」いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から)『国立歴史民俗博物館研究報告』第六六集、一九九六年。
- (32) 拙著『漆紙文書の研究』吉川弘文館 一九八九年。
- (33) 榎木謙周「宮都と郡の関係についての小考」(上田正昭編『古代の日本と渡来文化』学生社 一九九七年)によれば、宮都所在の郡が宮都に供奉する特殊な位置づけがなされていると指摘しているのも参考となる。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

Report on Provincial City of Ancient Japan: On the *Taga-jō* Site and its Surroundings

HIRAKAWA, Minami

A symposium on "Ancient Provincial Centers" was held at The National Museum of Japanese History in 1987. In that symposium there was a tendency to deny the so called "establishment of provincial centers" which involved urban functions and the spread of regions. Since then throughout Japan the site of provincial centers have been excavated and investigated, with important results. Among them a noticeable matter is the revelation of the grid divisions which were the basis of the urban planning of the *Taga-jō* 多賀城 site which was the location of the *Mutsu* 陸奥 Provincial Center and which was subjected to a large scale investigation. Furthermore, through that excavation many discoveries were made concerning the local structure of the grid divisions which were the city, the planned distribution of buildings in local areas, the various links of the transportation system, the ritual space of the city, and the concentration of production. However while considering the symposium INOUE, Mitsuo has indicated the following problem. In order to establish the provincial center as a city, it is necessary to confirm boundaries and various urban regulations. However there were no geographic divisions separate from the administrative divisions called "*Gun*" 郡, so there would be no way for urban regulations to exist in reference to the provincial center. An outline of the results of an examination of the conditions for urban regulation in provincial centers is as follows. Directional regulations extended to the avenues, streets, buildings and drains in the districts in front of *Taga-jō*. Also to provincial center area, *Taga-jō* is succeeded to special administrative city.

Furthermore unearthed materials with written characters attest to the fact that the *Go* 郷 in which the provincial office was located differed from other *Go*. It is also suggested that the *Gun* in which the provincial center is different from other *Gun*. Judging from the above, *Taga-jō* could be regarded as ancient provincial city. So far as other regions, much still remains to be done. So it is hard to say conditions of *Taga-jō* are true of provincial center of other regions. It needs further investigation.